



著述 乙彦 萩原

東京開化繁

輯 卷之上

76
1788
2



呂
1788
夕止

萩原乙彦先生著
三木光齋先生畫

淨書
東園生
隆

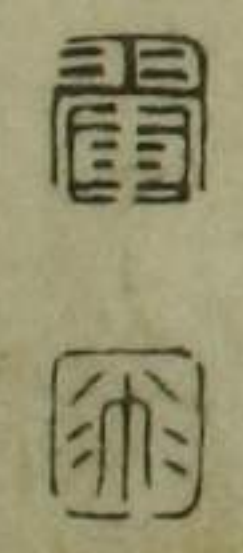
東京開化繁昌誌 二篇

官許 東京書肆 萬青堂梓



化美昭
千古

秋生殿學題



東京開化繁昌誌 二篇上

東京開化繁昌誌第二編目錄

上之卷

引首

上野東照宮

石叡萬世橋

柳原新景

青碧和泉橋

真黒美倉橋

古
胡

下之卷

石叡淺草橋

柳橋盛景

柳橋藝妓名表

書畫會

人品四等

風俗一樣

通計十有二條目錄畢

上野東照宮

卷中画
少人少字

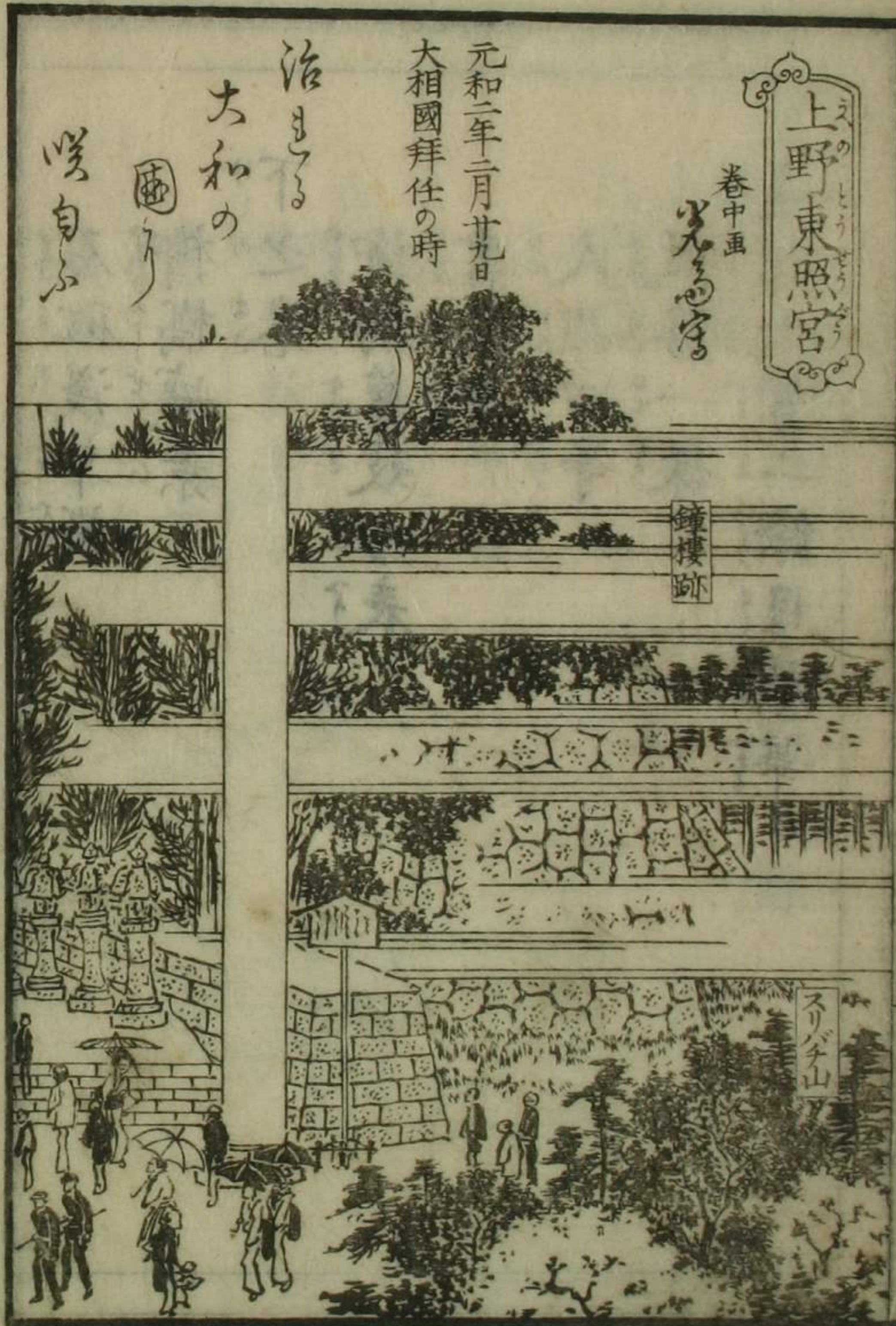
元和二年二月廿九日
大相國拜任の時

治もろ

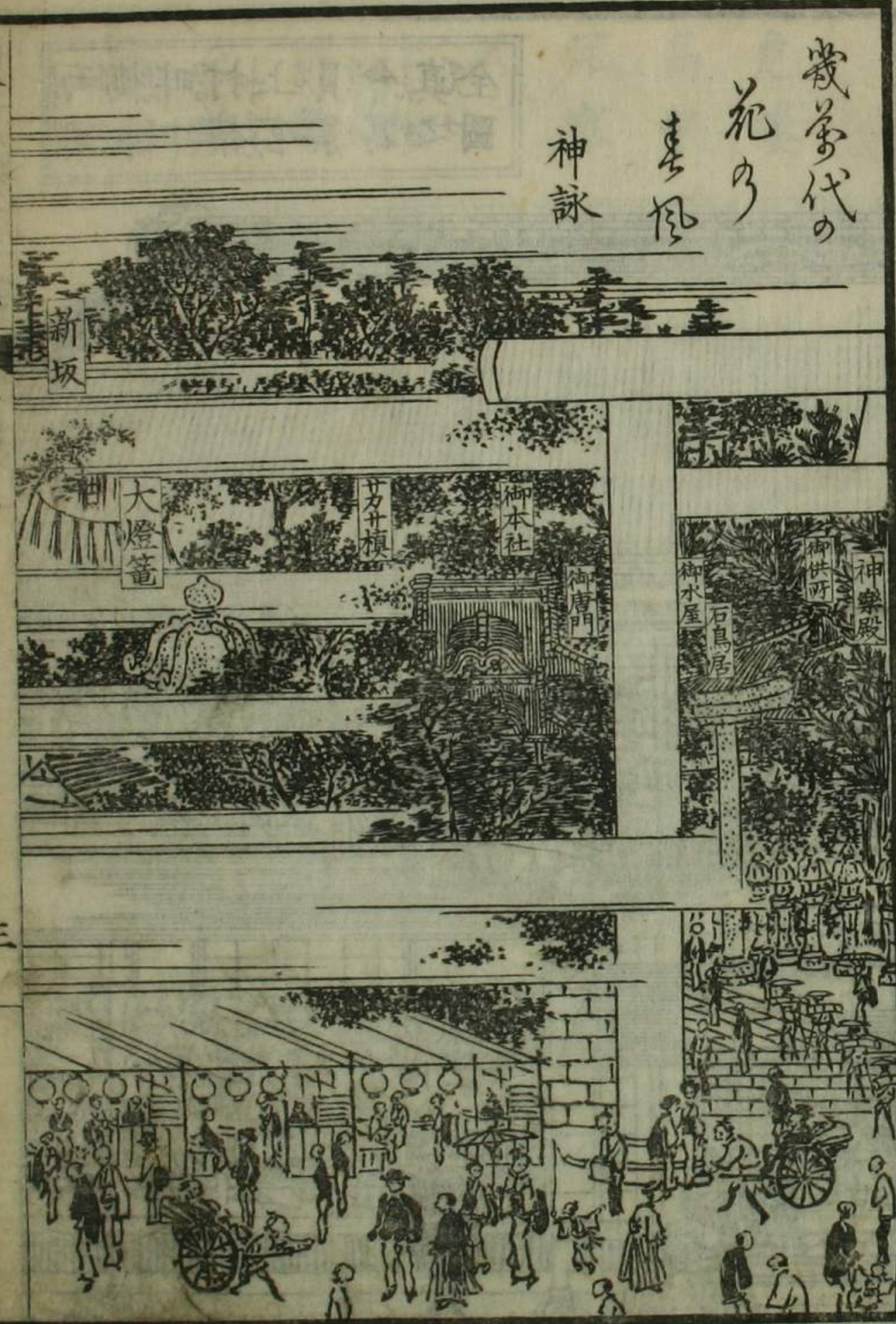
大和の

園

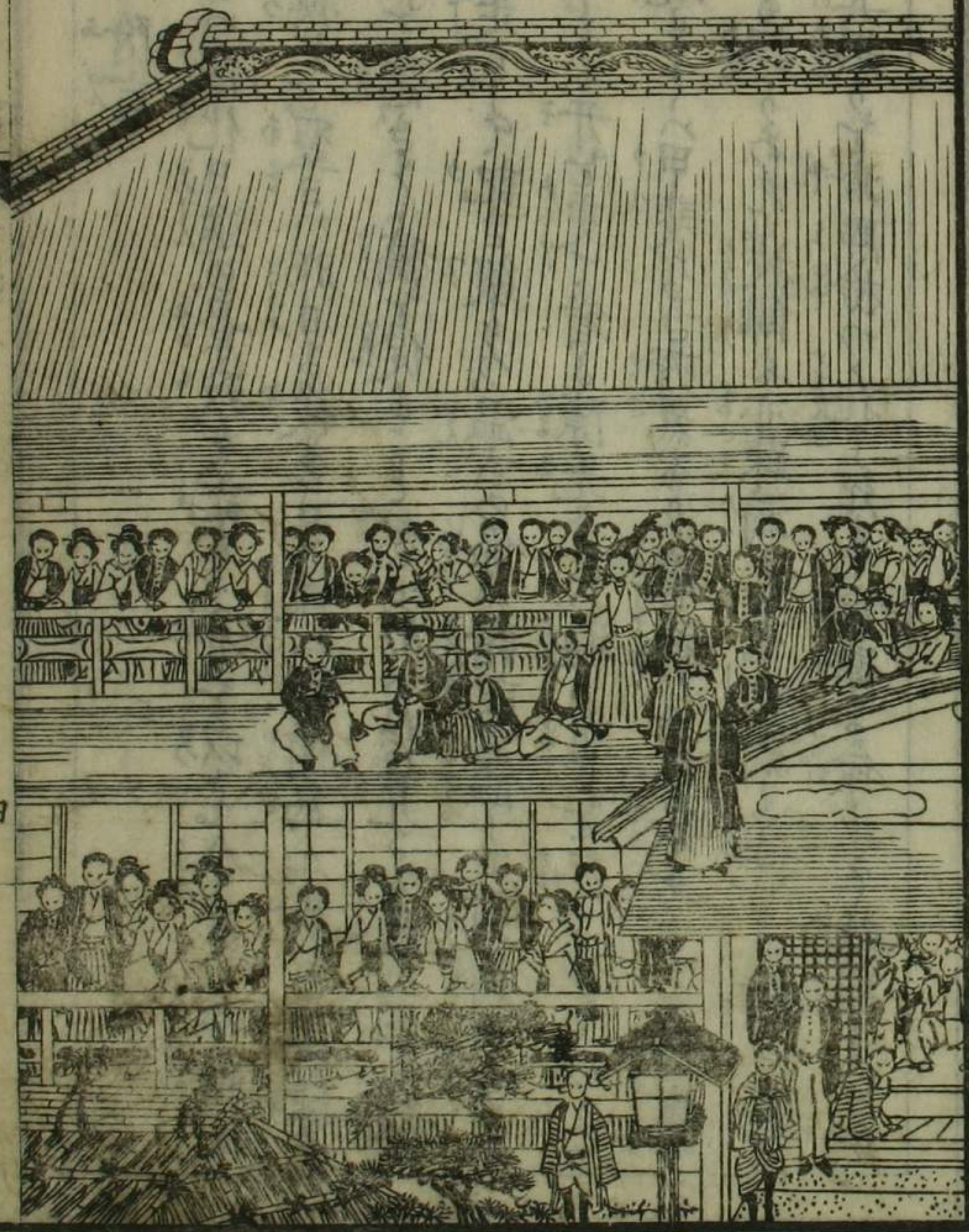
咲自ふ



幾多代の
花の
まき風
神詠

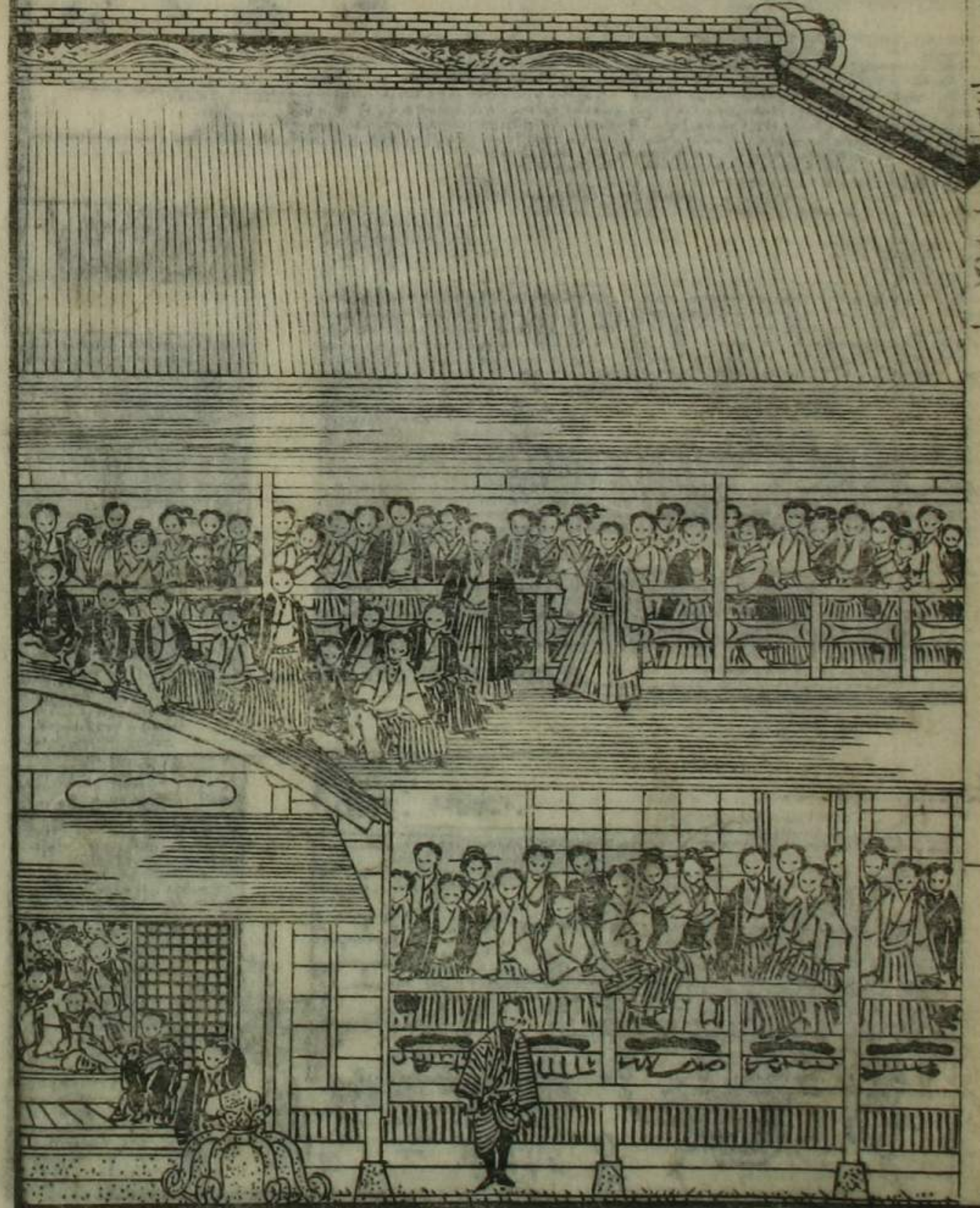


危樓高架 沉寥天 上相 閑登 立絲 旃



東...
二...
四

全鎮會員上村畔橋西
圖之寫集官樓中練國



東...
二...
四

附言

本書の開化日進の景致を記す有と以て。今日の事情を
 今日摸せど翌日の昨日も後も。流行を何為ん。斯まの書肆が
 疾兒を急ぎ。稿を促すと忽せぬ。見るも隨ひ聞も隨ひ。
 毫と走りて記き綴り。温古の條ハ諳記儘て。引用の書も
 載まども。丹と更て看る隙无ま。過ち有るを恐る。此のうら
 時。晩ま。甲斐なき所為あり。帝速なり。欲ま。備書
 剗剗も謬りある。校離も亦疎漏ゆ。初編も既ハ發行。後
 後。其誤りを漸點檢つ。孔。た。書肆も命。と。改刻つ。と。

製本三千部の後。由介。世。改正本と看官。後まぬべ。
 依。其。一。二。を。擧。巍。然。の。山。冠。を。脱。志。類。往。々。り。
 且。杜。撰。の。條。々。な。ま。と。就。中。海。賊。橋。其。一。を。記。二。を。説。縁。故。
 能。も。知。ら。ぬ。看。官。あ。ら。ば。靴。を。隔。痒。き。を。搔。け。心。地。ま。な。ら。む。
 重編の後。其。邊。の。光。景。を。復。寫。く。と。あ。ら。ぬ。愚。考。を。追。加。し。つ。べ。き。
 なり。此。ま。ん。初。編。は。誤。の。勘。ら。ぬ。を。以。て。見。れ。本。編。も。亦。誤。り。
 あり。開。復。三。編。正。ま。べ。魚。陰。の。病。ハ。各。書。の。通。弊。況。や。か。る。
 一時。の。戲。編。ハ。歎。息。ま。る。烏。許。な。れ。も。一。盲。衆。盲。を。引。と。ま。わ。る。
 婦。幼。の。為。罪。を。負。ま。ん。欽。遮。莫。君。子。ハ。為。ま。と。い。ふ。小。説。者。流。が

書記る。街談巷語无根よ等。死彼耶那の枕邊。啻一夕の御伽冊子。是非を論ずるも足らぬものなり。倘小道ありと雖も。觀るべき者有と一されぬ。菊堯亦菊堯あり。意を用うる由无らんや。是以云々と改正せざるを得ざれども。野語より尻を放。尻を穿る儔なり。

明治七年甲戌第七之月上旬

白石窟裡ある俳書二酉精舎の北房對梅宇の
總下り雕蟲の小技を甘んじて

寒鰥翁乙彦識



東京開化繁昌誌第二編卷之上

東京 萩原乙彦著

引首

今の開化ハ 神武以還未ごこと有ざるなり。東京の繁昌も。江戸表開府以来未ごこと有ざるなり。太平の時運文明の氣數天才を降。地英雄を出。民の聰明ある者と西洋學或ハ窮理家と稱。民の豪富なる者と三井組或ハ小野組と稱。遜恭謹慎や。町噺なる俗よ正敬的と云る者ハ。頭髮多く髻あり。之を因循舊弊と笑ひ。驕傲鹿慢や。之を放逸と云。俗よ大臉孔と云る者ハ。頭髮悉皆河童も似たり。之を文明開化と讚。聖經ハ迂遠と。

賢傳と愚傳と。然も今日言ふ所記する所何者。聖經賢傳は依らざる。元。依つ之を迂遠と。之を愚傳と。者ハ大々。啤酒を過飲し。酖酖如泥。成るなる。蓋醉漢ハ太平の兆繁昌の餘沢なり。侍も。繁昌誌の世に出る時なりけん本編の第初輯ハ萬青堂の主人ヨ請も。今茲第二月中旬草稿と通與し。筆刀兩工。日と經り。第六の月上旬。稍刊行。及びけり。其際他書肆より。同種の書二本出ぬ。一本ハ東京新繁昌記と號。體裁江戸繁昌記ハ倣く。漢文なり。一本ハ本編と同題。漢文ハ和文方今の御布告文ハ相似。俗ハ通俗本の體裁あり。共ハ才子の著述。陋拙余ガ本編のト比。胡頰。ま。了。

有ねども。同時相並び。同行。定。知。甲乙の世評必ず有る。嘗。聞。能。諷。間。の。狂。言。の。音。律。正。調。の。雅。頌。を。所謂陽春白雪なり。淨瑠璃哇。戲場踊。猥雜亂調の俗声。所謂下俚巴人なり。乃ち本編ハ下俚巴人一編。一日の戲場。等。狂言綺語の杜撰。原來婦幼の觀物。備。書。肆。ハ。好。戲。編。の。開。化。繁。昌。誌。三。本。同。時。撞。著。是。ハ。花。の。都。の。盛大。能。の。能。の。客。人。あり。間。の。狂。言。の。間。の。狂。言。の。客。人。あり。居。ハ。戲。場。の。客。人。あり。然。も。自。稱。僕。ハ。學。生。の。彼。書。の。賓。女。中。衆。別。童。蒙。衆。の。看。官。ト。此。書。

上野東照宮

上野舊の東叡山中。東照宮の御社あり。幕府盛世の賤者しせんの拜まゐするおとを禁きんせしむるが。去年癸酉の秋府社あきに命あませ出いきて。衆庶しゆじゆの参詣さんぎを許ゆるさざれば平民へいじんも廣前ひろまへに近ちかく進すすむ額ぬか著つき。仰あげ高たかき紫殿むらさきの莊嚴しやうげん屋根やね裏うら天井てんけい柱はしら勾欄こうらん咸みな最上さいじやうの金箔きんぱくを空あ間まも元もとく麗うつくしう。金具きんぐの滅金めつぎんに花鳥けうきうを雕うく。或あるひ葵あひの家いへ飾かざ草くさ赤墀せきの階かゝ廊らうに映徹えいてつして旭あすひは輝くく黄金おうごん世界せかい觀みる。射眼しゃがんと恐懼おそし。只尊ただうやさうも溢あふる涙なみだを拭ぬぐふ。若わかあは稀まれなり。恁たまは都鄙とひ遠近えんきんの老若男女らうじやくなんにや歩あむを運たび。貴賤きせん群ぐん参まり。累年るいねん閑寂かんじやくする。一宮地みやち俄然がぜんとして盛大せいだいなる。繁華はんかの場ばを開ひらけり。抑おさ此こ金殿きんでんの寛永かんえい

三年秋九月藤堂家より創造そうぞうせし。其後廿五年經へる慶安けいあん三年夏四月幕府より再建さいけんありて金銀珠玉きんぎんしゆぎよくを鑲うめ。麗廟れいぼうの成なりせし。青碧せいへき一條いっじやうの甃う階かゝ下したより十間じゆかんをり。殖う々うして参差さんさしあり。左右さうりゆうも都みやこて那智なち黒くろの砂礫さだを敷しく地ちを見みせ。四牆しじやうも朱しゆの瓊木じゆんぎありて左右さうりゆうに腋門あきもん二口にくちあり。方今ま群参ぐんまり依より腋門あきもんの左右さうりゆうの版いを取放とち。昇降しやうかう両口りやうくちの便べんと。靈瑣れいさも亦また四柱しじゆ扇門せんもん金箔きんぱくなからざる地ちもなく。且かつ登下とうげの龍松竹梅花りゆうしゆんちくめいげ王わう諫かん鞞ぎんの精刻せいこくあり。門楣もんめいも三面さんめんの家いへ飾かざを掲かぐ。黄銅わうどうの滅金めつぎんなり。上うは亦また靈鳥れいじゆを鑲うむ。渥彩おくさい光ひかり發は活かつ。如ごとく紅銅かうどうの甃う雕てう玉ぎよくの碩しやく何なにも毫末ごうまつも疎そへなく。土木とくぼくの精巧せいこう善美ぜんびを盡つくす。洪かう紛ふん輝き煌かう往わう時じの殷賑いんねん此こも著明しやくめい。青銅せいどう

の大燈三對門外の右左は相分ちて並び建てり幕府の三家と稱へ申せ。水戸尾張紀州の三館より獻備せられ所なり其
 它前面周圍は銅石の燈檠大小幾百對相對ひ相背く地狹まを
 建ち並びたる咸是當時御内外様と稱へ申せ國主城主の諸
 大名より奉納せられ今其誠心を姓名も遺されり就中
 宮門へ對ひて右の傍なる燭檠は三家の大燈は頡頏まき紫銅
 の製造ふと奉獻も慶安四年四月十七日加能越三國主菅原姓
 松平犬千代丸と鑿り。這犬千代丸と申せ。前田家加能越の
 國主たる第五世の主ありて大納言利家卿の末男中納言利常
 卿兄利長の世嗣の嫡子筑前守光高朝臣の嫡男なり。正保二年夏四月

五日父光高逝去の後祖父利常卿を以て幼少なりて家を
 繼ぎ百二万五千石餘を領せり。承應三年春正月十二日冠を當
 時徳川家四代の將軍嚴有院殿家綱公の諱の一字を賜りて
 四位少將兼加賀守經利朝臣と申せ。なり。件の獻燈は當年
 より四年前より任官せられ童名を彫るなり。俗の入毎は
 口吟とて國主首と稱へり。前田家既ハ斯のど。況んや其他の
 大小名各恭敬禮拜して獻ざる者誰有ん。武徳神威の赫々たる
 仰がざる者誰有ん。宮門は對ひて右の傍は俗争ひの杉と
 稱ふ。一大奇樹直立せり。高さ凡そ五六丈數百枝繁茂と稱ふ
 悉く地は垂くれ能く其幹も根も覆わす。遐くより之を

望より。松杉ろ分別難し。故に件の称あまも。其実、高野
榎なり。星霜幾回を經りけむ。森然たる神木かきや。匠匠
も桂栲を造り儲る。諸人の近づくを禁めり。又帝這樹の
たり。靈木異草の種々なる。其たは甚くならねども。悉く標出して
名状まろ。違あらび。靈瑣前の神道九そ一町餘り。石と疊と
平坦なれば。下駄も足駝も麻裏も。雪踏も靴も礙けなす。半途は銅
造の水盤一ツ對あり。亘一四尺をり。高さ臺とも六尺餘りなり。是は
東京高社の仲買中より。新献なる所の由盤面は陽文にて。判然と
凸識し。此を距ると二十歩をり。乃ち宮外神道の中央に。
石の大神門建たり。高さ凡そ三丈ありとぞ。兩氣の柱太二圍

餘り。天の蓋棟地の横梁人の心柱總々。金石の神形是。神武天皇
四年は頭八尺の鳥が奏せしと云。神の告は法。所其兩柱の陽は
分刻して白く奉寄進。石華表一基。東叡山東照宮大權現寶前
得鉅石於備前國。迎茲南海運于當山陽。推而奉建。寬永十年
癸酉四月十七日。廐橋侍從酒井雅樂頭源朝臣忠世。その一柱陰は
追刻して曰く。右石華表者七世祖考雅樂頭忠世所奉建也。今茲
蒙台命加琢磨奉再建。享保十九年。甲寅十二月十七日。廐橋城主
從四位下酒井雅樂頭源朝臣忠知と記しあり。維新の際。酒
井家より奉還せられ。播州姫路より。從四位少將忠恭朝臣實延
二年より移封せられし。以還の所領なり。這鶏栖より。迤此方の左

ある。樹木の間に、稀世の大石燈籠一基あり。江戸名所圖會に白く高き
二丈餘り。笠石の經り一丈二尺、棹石三圍、京師南禪寺、尾州熱田社
と、當山とを併せり。日本も三の、大石燈籠なり。いづれも同ト人の
造立まら、所ゆり。比類なき。銘も寛永八年壬寅七月佐久間大
膳亮勝之とあり云々。と載る。是あり。此は二百四十有四年の星霜と
經るも、石をなや、笠石の端、葎手の上面に、自生のハツ手四五莖あり。
仰望して、推量する。七八尺も暢く、らん。又宝珠石の根より、推の木
一幹生出る。是も五六尺、有ぬべし。俱も枝葉繁茂して、寔り
雅致あり。一奇觀なり。件の奉納の主、勝之の當時、一城の主あり。
介らざる、如斯大業を、如何く為し得べし。藩翰譜を閱むるに

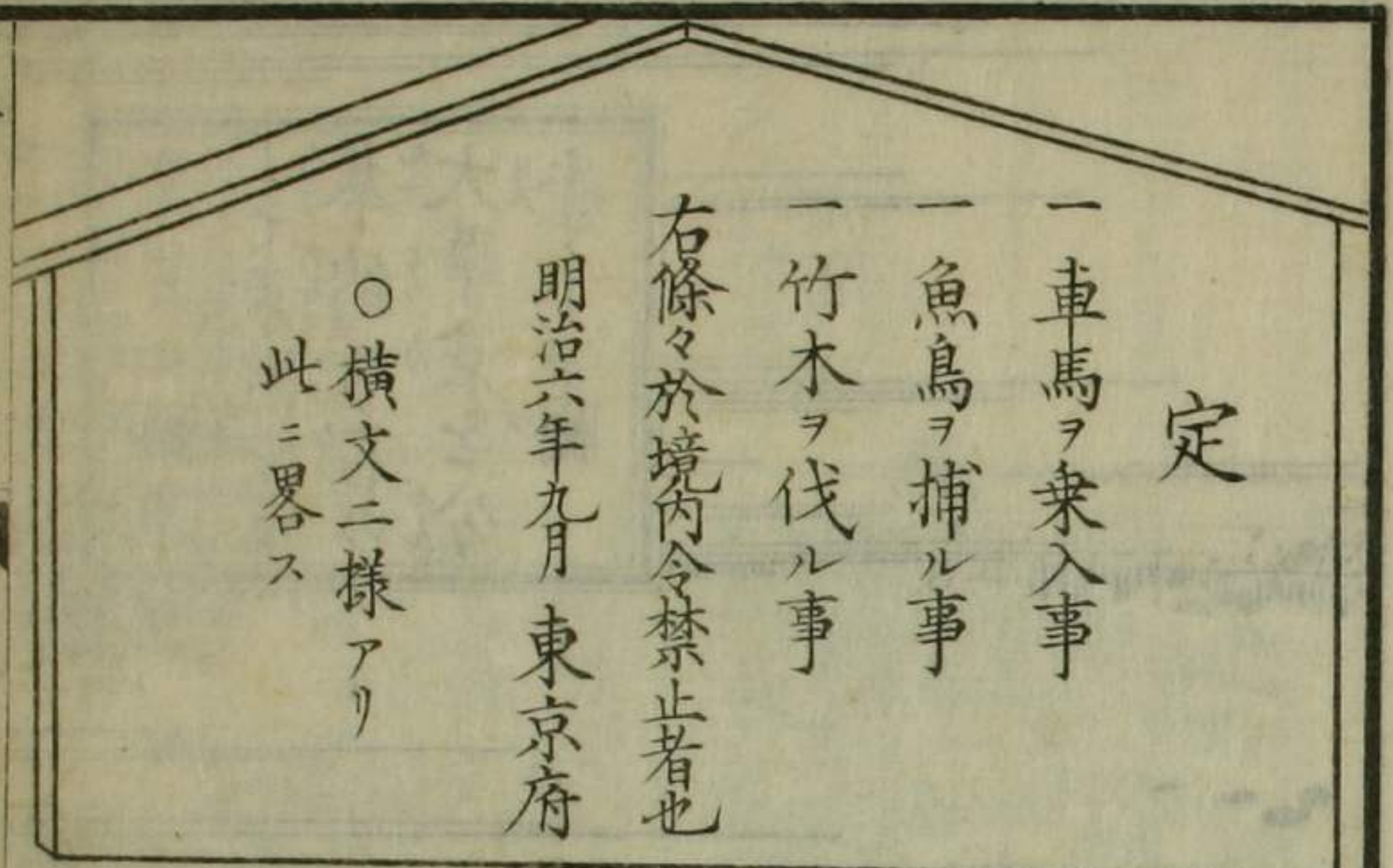
先祖も三浦介義明が一族なり。鎌倉殿に隨ひ、あせり。安房國
佐久間の庄を賜ひしより。代々佐久間と名乗けり。中頃の先祖本
國を去り、尾州愛智郡に移り。久右衛門尉盛次に至りし。柴田
勝家の妹と娶り。六男子を儲く。就中二男備前守平安次、四男
大膳亮勝之の慶長五年、徳川殿の味方と参りて、大坂の戦ひに
軍功あり。元和三年、安次信州飯山の城を賜ひ、三方石を領し。七十三歳
ゆして、寛永五年七月廿五日卒す。嫡子勝次、父を先づいて卒す。これに
二男安長家督と。其子三五郎勝長、父安長卒し、後幼少して家を
継ぐ。寛永十五年、歳僅九歳、少く早世し。世嗣無き。家施ぬ。これ
摘要。是佐久間の嫡流耳。彼弟勝之も戦功ありと聞へり。封土の

賞有ぬべきを藩翰譜より脱しり。南向茶話勝之一万八千石と
 領也。云々新編江戸誌に載れども。延宝元年の江戸鑑よ。武鑑あり
 佐久間備中守勝義在所信房長沼一万石云々。とあり。勝之の孫なり。
 天和三年の江戸鑑よ。佐久間安房守勝義祖父大膳亮父藏人云々。
 とあり。如し。是佐久間家の庶流ありて。其祖父大膳亮とあり。若し即ち
 大石燈を奉獻せし勝之あり。帝異あり源氏とあり。平氏の謬字
 なると必せり。厥右勝義の男織部勝重貞享五年五月十八日。故ありて
 領地を召上られ。丹羽越前守へ預けられ。由断絶録に記したり。
 茲に庶流も跡絶く。彼石燈籠の修繕を加ふる。縁由の者も在り。む
 方今の其臺石傾き。石間離々として最危く。嗟乎壞らん形勢あり。

定

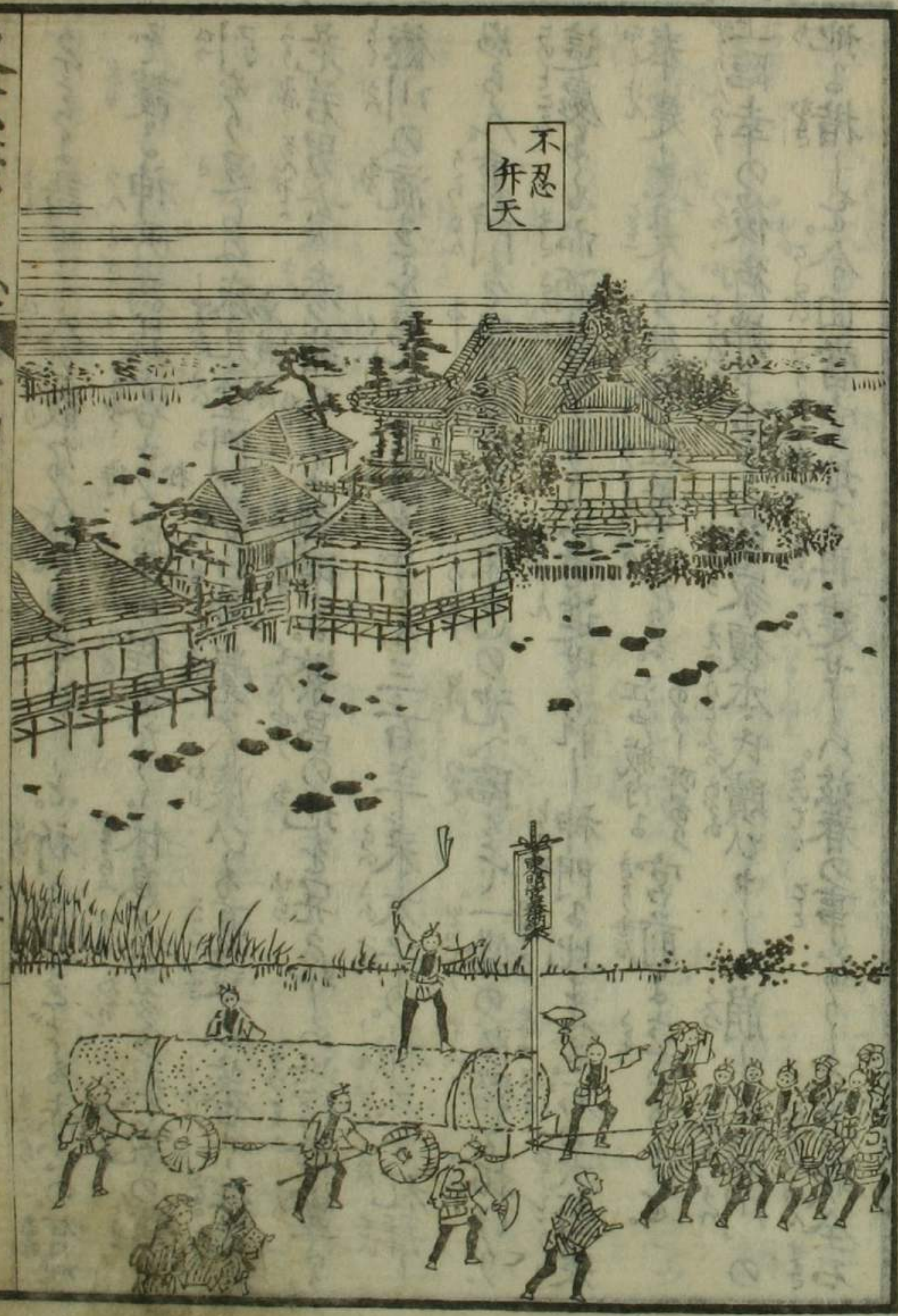
- 一 車馬ヲ乗入事
 - 一 魚鳥ヲ捕ル事
 - 一 竹木ヲ伐ル事
- 右條々於境内令禁止者也
 明治六年九月 東京府

○横文二様アリ
 此ニ畧ス

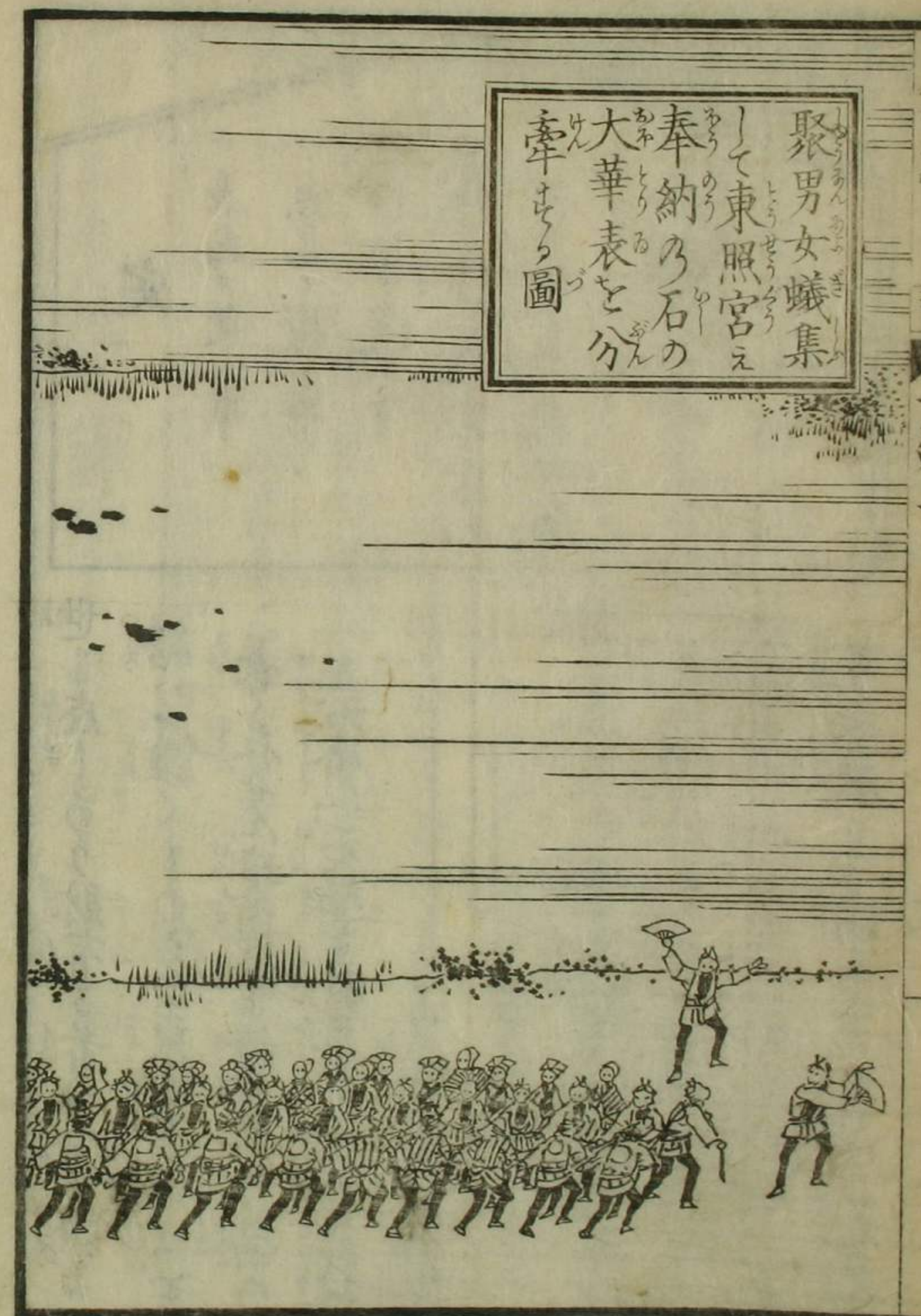


世も志あり財有る者の。今の際よ
 繕ひ難くもあらで東京の隨品を
 長く存せん。境内此は稍及て。外構ハ
 左右齊一石牆を新築し。正面は杉材
 の大華表を新献
 高さ三丈
 餘りも有べし。傍に制札あり。上は載る如し
 件の華表の左右より掛並びし
 水茶屋の各自も漆做し。翻
 花網簾。日か宿ありて。當山の花見

不忍
弁天



聚男女蟻集
 して東照宮え
 奉納の石の
 大華表を分
 牽まらるる圖



かつては詣で一人の散らん後由来よりと祈らざるとも赤心の有
 を護る神所為欵客まつ平の程もなく。休息人の多るれ、孰の店も
 引たり足らぬ床几臺門が夢の跡、覺く懐ひも夏草の蕃く往来ふ
 老若男女が参詣日々彌増る繁昌の地を昇れ、此宮神靈
 徳川の流を挹むも汲まざるも。三百年來太平の神恩を礼拜
 ぬらん。裏門の西の崖より。不忍の池へ臨みて一條の改路を拓けり。
 這處も亦酒井家より。寄進せられ神門も比まき石の大華表
 奉建は是より往時紅葉山なる。江戸城内も宮前より立寄りしを。
 主上臨幸の後御拂下り。商家榎本氏贖ひやり。崩して深川の
 地も措しを今回當宮地も再建せし茲春の事なり。五義全石

然と成巨大ありぬ有され蓋棟石も三斷も成る。其二斷を修羅
 石車上ても重きこと何千貫目ぞ所謂大磐石なれば車は四條の綱
 を附て數百人にて牽くありは動かさなくも无りしを。運送の
 路は市井の男女長少賢愚招き、蟻集して細を拿
 らんと乞ふ者の數百人に餘り、幹事們不意き幸ひも。悦び
 勇むると大方なれば是併あがり神徳の著明き所なり。人意至誠
 も出る所誰か感嘆せざらんや。今程は幹事們は俄に男女を分隊
 て。妝ひ飾りて聲花なる。婦女子を撰ぎ前驅上り。這班凡そ二百餘
 人。自ら妍媸も有るも。百華一時も發開る。色香を競ふよ
 異るべ。男の隊は次も接して。各四條の綱を拿る。男女彼是四五

百人東照宮奉納と大書した。版一枚を青竹に挟み其竿頭は清楮を覆ひ紅線を以て結びしを車上より高く押立て。後あり車夫數十人力を極め之を押し。為人足も數十人幹事と俱に前後を警固し。左右を護送し。往来を妨げず。一夫輿擗を唱ふ。聚男女之を和して揚る打號の鯨波徐々と牽行く。聲も麗々として勇ま。一時意外の壯觀なり。升中より賤婦やて小兒を細帯りて肩背に交りし。綱を曳るもあり。其身の程其志し。養生なり。むと想像ら。或ひハ弊袍の老翁。晚母。此擧の拵。堪むして。意中も感む。由りけむ。綱を曳き耐む。手を振り足を踏鳴ら。節も不調。重回して。色可笑け。唱ひ。跳踊行くもあり。其唱歌を聴く。く。よ。

此神の御蔭を私に愚さるも喰て寐て著て居ま。こと。實も御恩の深き有り。有。今。の。世。も。老。髯。を。あ。げ。働。け。ど。喰。て。居。る。の。が。む。ろ。う。の。壽。長。き。の。恥。多。く。あ。ま。さ。け。な。わ。い。是。あ。ん。方。今。世。も。流。行。も。角。力。を。々。々。う。ろ。も。と。れ。最。も。賤。き。類。あ。ら。び。鉢。叩。の。唱。歌。も。擬。した。古。雅。を。昔。の。刃。心。を。れ。其。人。品。の。見。ら。る。耳。余。本。日。谷。中。天。王。寺。あ。る。先。師。菱。湖。翁。の。佳。城。一。詣。で。つ。帰。路。不。意。に。件。の。大。擧。も。邂逅。て。目。撃。し。ぬ。光。景。を。本。一。著。述。し。幸。ひ。の。因。こ。を。得。し。ま。ば。状。實。を。略。記。し。て。以。て。世。に。傳。ふ。蓋。開。化。敏。亦。昌。の。世。風。視。る。よ。足。る。の。の。ら。斬。髮。肉。食。の。世。才。子。ハ。舊。弊。未。脱。と。

姍笑せん欽然せども因循家の事情も切りて感働しぬ。も有ぬ下
 始り藤堂高虎朝臣此おん宮を造宮せしん庶民参詣の爲ある由
 藩翰譜よ曰く紅葉山の地を下して御社宮とて高虎思ひける
 抑大御所ハ神君當代の太祖あり。代々の兵乱を攘ふ。再び天下の
 恭平をいづるべんそ天下の土民誰も其徳を仰ぎ参らせざらん
 然るも此御社を猶都城の内ありて御家人等を初め天下の土民
 参詣。参詣せんと叶ふべからず。あそれ城外に御社を造りて天下の
 土民ともよ。齋きまつらむと思ひ立す。此由を望み。聽て許容を蒙
 りて多色バ忍の岳の別業を毀ちて地禳ひして御社を造り出せ其後
 寛永年中は彼岡より比叡山を移され。御影寺に建立ありし云々。

有斯バ此宮の造宮ハ比叡山未開の前あり。後ハ寛永寺に併され
 一ノ件の説ハ因と江ハ方今庶民の群参こそ。高虎朝臣の本意ありぬ。
 況く神威も開化は光りて衆人渴仰大なるなりぬ。当社の大祭稠
 昌々。陽曆第四の月十七日と。陰曆四月十七日。両日ハ執行あり。神輿
 の巡行ハ未だありぬ。終日の神樂奉納の大幟。饒物の美麗なる。奉
 燈の夥しき。枚挙は違あらず。乃ち奉納所ハ御供所と共に。宮殿の
 北方より。當下拜殿の鈴の舌カラメク。

這間ハ作者乙彦白湯と一口喫と曰く。重編の中ハ神社佛閣の
 祭典法會ハ部を分ちて別記さんと思ふ腹稿あり。委曲ある事ハ
 其編中ハ喋々。看官さく多々ハ版元の寄ハ重編の招牌と

貼せらなりん。其時そのときも作者まけうの鼻講はなこう坐まり高たかくして扇あふぎをく咬かめく
件けんの宮北みやきたの古樹こじゆ蟠ばん鬱よく々々。耽たん々々々。晝間ひるま猶なほ暗くらき。蓮池れんぢの淪りん猗い
日光にかりを假かりと。水影みづかげ樹間じゆかんは閃爍せんさく々々。巽そん二に適あつち操あそる。鳥聲とりこゑ俗耳ぞくみみと
針砒しんじん。崖下がきの入煙いんえん時ときとして。油然ゆぜんの雲くも擬なる。崔嵬すいゑい岩い滑かして履ふ跟こん
を跣はだかむ。實じつは神々かみかみき。清地せいぢ是本編ほんぺんも。記きもも要えいなき。塵芥ちんけ閑雅かんあ
此光景このあかりあるを所謂しよゐ戲場げじやうの事ことを假かりと。繁昌はんかう世話場せわじやうのぐんどう返かへし。
無語むごの幕まくあきなり。即すなはち元祖げんそ市村いちむらが工夫くふうなり。ねど大機關おほいけんかんの萬世まんせい
橋はしを次つぎへせり出いし。看官かんくわんの喝采かくさいをこゝろのそ

石砒萬世橋

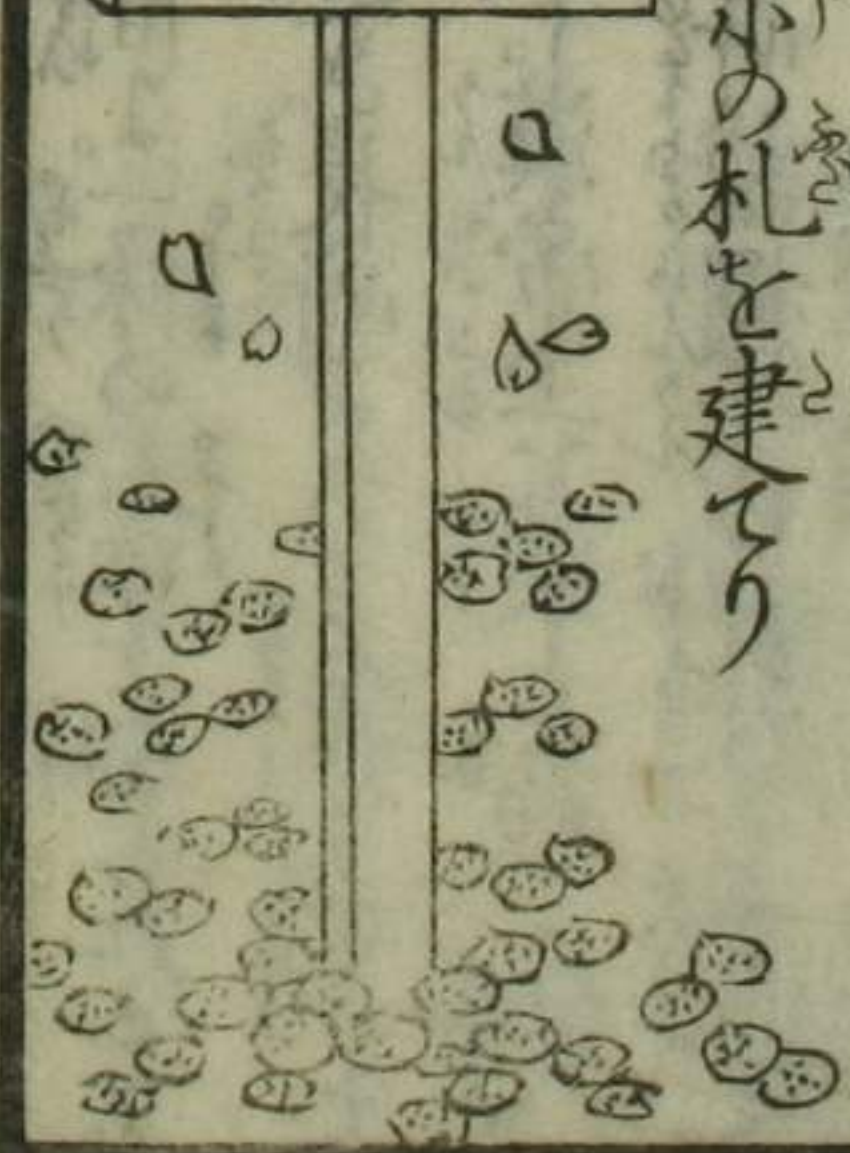
神田川かんだがはを北きたに臨のぞみて。以前いぜん外部そとの封疆ふうきやうより。筋違すぢちがひ見附みつけと廢やぶせられ。

其數そのかず千方せんぽうの大石おほいしを以もつて。筋違すぢちがひ橋はしと昌平かうへい橋はしの間まは一條いちじやうの石砒せいを架かせられり。
廣大くわいだいなり。平坦へいたんなり。精巧せいこう善美ぜんびは。近ちかき長崎ながさきは。石橋いしはしは甲かこそ
是こゝを是こゝとすべし。是こゝを秦王しんおう金を柱はしらと作なし。漢帝かんてい王わうを梁りやうと為なし。仙人せんじん
飛とで往むかふ易やすく。道士だうし出いて歸かへり難がたけん。俗ぞくは所謂しよゐ欄干らんかんの親柱おやばしらは太書たいしよして。
萬世まんせい橋はしと彫うた。北きたより昇のぼる右手みぎては立たてり。何人なんびとの筆ふでなり。む。楷書かいしよ
未いまだ脱だつ凡ぼんあり。ねど。南なんより進すすむ右手みぎての柱はしらは。と。此こゝは。橋はしと大字おほいは
刻きせし。假字かりの運筆うんぴつ至妙しせうなり。連綿れんめん字じは。有あらねども。懷素わいそが遊絲ゆうし
爛熳らんまんたる。連綿れんめん法ぽうは。讓あがる。此こゝは。這橋このはし全體ぜんたい石造いしぞうなれば。梁下りやうかと雖なほも抗かたは
有あらば。磐石ばんしやく累かさね々々重おも々々として。潤うる。二條ふたじやうの水みづ路ぢを通とほる。舟ふねの往來おうらいを
妨さまたげず。但見ただみる。青碧せいへき峩い々々として。神田かんだの内うち外そとは。衡へいなり。兩空りやうくう洞どう河か流りゆうは。映あぶ。

一雙全圓水欵天欵宛も巨大の一雙鑿此は縣にて市井衆庶の善惡を
 観る者欵既一俗人始り眼鏡橋と綽号せしあり今ハ大々通稱して
 萬世の名ハ婦女童蒙も識らざるも勘々ハ橋南ハ昔日見附内ハ小路と
 稱し地ハありハ小路とハ筋違橋の口昌平橋の口後河原の口小川の口這廣地今中央ハ松柏花木を
 新栽せられ双林を修理つて一問一條を車馬の道と双林を隔てて
 左右も亦車馬路あり各標示の札を建て人の歩行するを停む
 其左右四條ハ人の道あり此も亦標示の札を建てり

人道

牛馬諸車
入べりしず

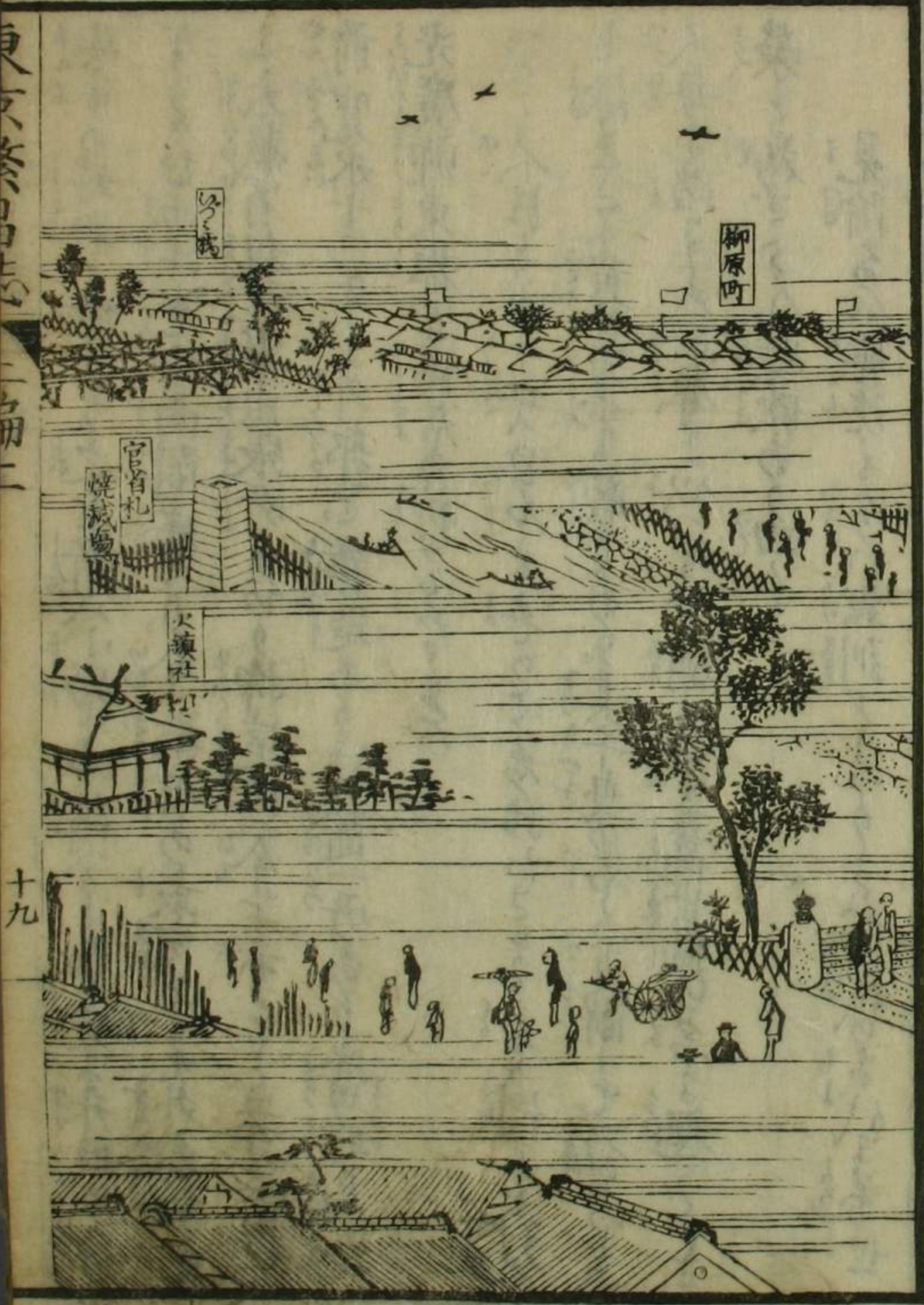


右の如く又林木の制札あり左の如く

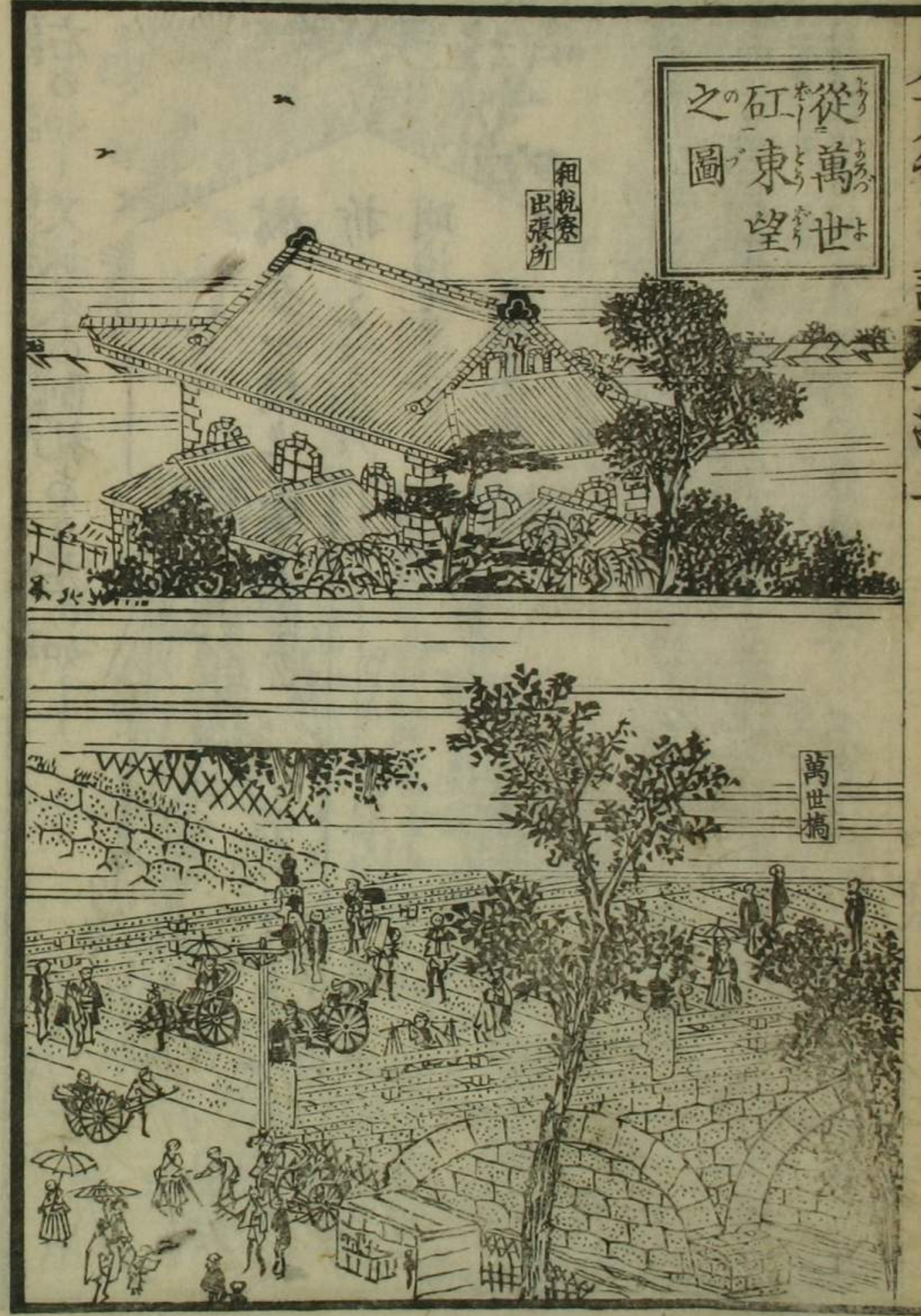
定
 樹木一校も
 折しとるべし
 明治七年五月
 東京府



斯まハ這地馬車人車敢て歩人を妨げざりしを歩人
 却て車馬路を私し車を妨ぐ其輩ハ無文兎も但一慢し出ぬ
 林園生る此も繁昌の東西あり各路砂砾を鋪て平夷る人民



十九



從萬世
之東望
之圖

東...

安歩の好地と倣まり。之を新八小路と名謂べり。曩は升形の跡
なり。西洋造の高閣建てり。今造営の最中あり。外面の榎杭
は大藏省租税寮出張所とあり。抑這地の今を去ること二百三十九年
前寛永十三年より外郭を築造ありける。隨一所有あり。當時烏丸
光廣卿東都に僑居の折と云ふ。

人法と千曳の石もそのころはあさきまきまの例にあざむ
と詠述く。黄葉集に載りあり。其千曳の石も瓦解して乃ちつとふ
人毎に踏するに耻辱に似しとて。猶も治る萬世橋の名は輝くを。
榮と為ざらん。戯歌あり曰く
見附るの服流も今の世に似たり。ぬ御代のお代は萬世

柳原新景

萬世石を架ぬ。南岸の西も乃ち駿河臺東に柳原の土堤此に。
這封疆も猶東の方。浅草橋を連接したるを。悉く崩壊して。
堤上は林茂り。數百株の柳の中。年最老し大樹をのみ。僅所は
残せり。昔享保の初年なり。有徳院殿土宗公の釣傘を植
といふ。慶長年間の江戸圖説ある。柳原の舊跡を。形をりも存
まらぬ。其の款余も。其根を下したる。土も堤下の往來も平等
小成けきを。根を露せしと五六尺。周圍僅に削り遺せり。四五尺
四方の土に立てり。丸木二三本寄つけり。杭も打て土留めり。
一個の盆栽も異なり。緑葉謝る秋に至りて。一風雨を最期の

際。屠所の羊の歩まぬ彼辨慶が衣川なる。立往生の形容
なるまとも。舊物をまじり惜むは足らぬ。其邊も亦新栽の樹木長
短参差として。已前鼻の支々。封疆の窮屈あるまじ。西北も
駿河臺ある聖造の高閣あり。聖堂及び神田の神社妻恋湯嶋
も連接して上野の緑樹は相對し。濃淡幽蕩縹緲を一望して
晴々たり。昔日土堤を背向ゆたり。床店の敗穢は悉く廢退
せらむと。對ひたる叔藏を甫め。人家も由ある竹馬行或は黒板
塀武家邸郡代邸に至るまで。北向一面新開の町屋と做りて開店
したる。千工萬商貨を銜ひ各舗來賓絶間なき。繁昌昔日は所増多。
就中一叢祠あり柳森稍荷と称す。和泉橋の西畔も依然として

著明。土谷此地を縮荷河岸と喚り。彼の紫も奪々。王垣の
朱色増て。却て柳の緑を奪ひ。森の名あつて遺まらん。這地柳
の堤かりを。柳原と稱して。往古荒茫なる原なりけり。舊名を襲
ひたり。慶長江戸圖説に曰く。ゆゆしくより細流一筋あり。これ神田
山ぎりの。柳原より出るなり。云々註は柳原とす。地名も古き事
と見ゆ。云々又り。柳も多くなり。明暦の回祿して。此柳も悉
く失せしめ。昔此所も柳原町とす。六町あり。有しを寛文二年
本所の地へ移されしと云々。寛永九年の江戸圖を看む。彼八
小路及び土堤の地和泉橋まで町家とす。其東の土堤の地も
同く町家とす。所謂柳原町此なり。其東稍盡なる。浅草橋の

際きわ。僅ひたひた柳堤やなぎづつみとあり。明曆三年正月。開版ひらきの江戸圖えどずも既に二十
 二年前せいで。建築けんちくの外郭ぐわくあり。土堤つちづつみの地ちを何なんとも記しさば。只其
 輪郭りんかくの断地たんちは斯かのごとき。標めしあり。此時このときもそも土堤つちづつみは倣
 りて。町家まちやの開ひらき接つぎに在あり。南側みなみがはの諸藩邸しよはんていなり。當月そのつき十八日の
 大火おほひ。市中いちちゆう總しゆうて一變いつへん。これ慶長圖けいぢやうず説せつは。此時このとき柳やなぎも失うしせし
 あやとびへるなり。按あんず。當時このとき古名ふるなを存ぞんして。町家まちやの間彼
 此こち。柳やなぎの木き立たち生せい出いでる。今の如ごとくならん。其二年このふたとし。過すつ後のち
 萬治二年まんぢに。仙臺侯せんたいこう台命たいめいを奉ほうじ。明年あしたとしに至いたり。若溪下わかしやうげより
 柳原通やなぎはらどりを堀割ほりわりて大川おほがはへ通路つうろと成なる。由よし。武江年表ぶぢやうねんぴも載のり
 諸記録しよきらくも因より。なれども。其前そのまへ江戸名所圖會えどなしょずゑも。此説このせつを不審ふしん

。古老こらうの説せつを舉あげ。是こゝを。事蹟合考じせきがうかうも曰いく。綱宗つゐね
世は高尾を殺
害せられし
仙臺侯
 上意じやういを伺うかひ。浅草御門外あさくさごもんがゐより。水戸橋みづとの西際にしぎは江戸川えどがはまで。
 荒川筋あらかはぢより。船入ふねいり堀通ほりどりせられり。荒川あらかはと西國川にしこくがはなり。其
 堀ほりの土つちを搔かき上げ。南北なんぼくの葦地あしちへ引ひき。故土堤こゝろづつみも高たかくなり。中なか見みも
 明曆三めいりきさん。大火おほひ以前いぜんの事ことあり。云々。此舉このきよ水路新開すいろうしんかいあり。後のち前まへの
 川底かゝぞを深ふかく。川幅かゝらを廣ひろく。船ふねの自由じゆうを開ひらき。此水條このみづぢやう
 の古ふるく。昔時むかし神田山かんだやまの谷間やまあり。山上やまの上。兩水りやうみづの落おちろる。一
 前まへ。小峯こねた。寛永圖かんゑずも。既すでに淺草橋あさくさばしより。上かみの方かたは。橋四條はしよじやう
 架かす。又また按あんず。昔日むかし柳原町やなぎはらまちの河岸がはは。低ひき土堤つちづつみあり。けん
 件けんの事蹟合考じせきがうかうも。土つちを引ひき。故土堤こゝろづつみも高たかくなり。云々。と記しす。

低き上よ。覆ひ築き。文體あり。只は町家の平地なれば。斯も
記すも。きなり。遮莫高低も。村後。開化東京の新世界柳
へ別品の。腰間よ止まり。原ハ同訓其腹へよんことを思念
客の夕夕き。當は是繁昌の源なり。

青碧和泉橋

萬世橋架りてあり。筋違橋を廢されし。萬事真直なり。世表
昌平橋を廢されし。儒道を迂遠とせし。介も
人間上下を正し。辿る路の。在ん。因りて昌平坂の名を
存せり。共は石の西中。東の一望。和泉橋あり。維新の後
架更りて青ペンキぬ塗られ。一條の琅玕。赤黒は衡と疑はる。

柳原の柳の緑と此へ引集めたるなり。這橋は日本橋前後
より。下谷へ通ふ大路なれば。毎日往來繁昌して。人足馬蹄車轍
を踏消し。蹄轍也人蹤を穿つ。方今の。昔日も下谷の數十區
の藩邸ありて。間幕府旗下數千名。連門接館稠密なれば。
日間も。黄昏より。夜店の燈燭道路を照らし。
往來提灯を旁り。連軒商戸の老舗。今中へ猶盛なり。
煙草店は鴻野屋あり。糸店は辻屋あり。今ハム銀行支店
たり。蒲焼は春木あり。荒井あり。船宿は明石屋あり。又川一あり。
兼子屋。遠月堂。甘泉堂あり。其它千種万品の。各屋鬻販の
繁昌。昔日西國の旗頭三十五万石の藤堂家町は臨みて

巍然ぎぜんとして。其その它よ小藤堂大洲ことうどうおほしづの加藤宗かとうむねは佐竹さたけは立花たちばなは併あせて
生駒平内いこまへい加藤成是かとうなるし是こ工商こうこうの仰あやぐ所ところ就中藤堂家しゅうちゅうとうどうけも。當地あた大名
の巨魁こけいなれどや。宗祖そうそ和泉守いづみもり高虎朝臣たかとらあそ早はやく此橋ここのせと架かけられぬ
故ゆゑ之これと和泉橋いづみはしといふ。古ふるく殊ことは重おもんど。和泉殿橋いづみどのせと称なづせり。
按あむる今いまの病院びやういんも。其上そのかみ邸やしきの遺跡いせきありまじも。昔むかしは下邸しもやしきなり。
べし。慶長けいちょう江戸圖えどず。藤堂和泉守とうどういづみもりの邸郭やしき。神田口かんだぐちの橋内はしうちは在あり。
是これは近時ちかごろなり。神田橋見附かんだはしみづけの内うちなり。寛永九年かんえいくわんねんの江戸繪圖えどゑずの
同所どうじよは藤堂大學とうどうだいがくとあり。是こは二代にだいの主高次朝臣ぬしこうじあその事ことあり。其その父ちち子この土邸つちやしきなり。同圖どうず神田川かんだがはの條まじは。和泉殿橋いづみどのせといひて。
其その北方きたがはを略りやくしたれば。下谷しもやの邸郭やしきの知しとぬども。下邸しもやしきありて

記しさぬものべし。明曆三年めいりきさんねんの新添しんせん江戸圖えどずの既すでは下谷しもやの邸やしきありて。
藤堂大角とうどうだいかくと記しし。併あは舊ふるの神田口かんだぐちなり。邸やしきも在ありて。當時たうじも。
下谷しもやを上邸かみやしきとせしもの。馬うまより前まへは高虎朝臣たかとらあその寛永七年かんえいしちねん
冬十月ふゆじゅうがつ五日ごにち齡とし七十五歳しちじゅうごさいありて。逝去せいきよの由よしなり。其その前まへは
架かけられしこと必かならずせり。今いまは和泉殿橋いづみどのせの稱なづせり。高次朝臣たかじあその
一世いつせい和泉守いづみもりに任まかせられぬ。其その子こ高久たかく和泉守いづみもりとんども。後のちの事ことなり。
盖はた下邸しもやしきの辺へりありて。橋はしを架かけられし。私わたくしに登城とうじやうの便宜べんぎを取とる為ため
か。諸人しよじんの助けをせし。敢あて橋はしの沙汰さたも内うち。然しかるに
其その徳とくを今いまは稱なづせり。既すでに其その邸やしきもな。其その領國りやうこくも奉還ほうげんせり。猶なほ代々たいていの官名くわんめいは青ペンキあおペンキも做ありて。遺のこるなり。此橋ここのせ北きたの西にし辺へり。

南北三三十間をうり。東西も筋違迄なる。以前より市中の原あり。是も河南の土堤に接して。叔藏敷區ありたれば。除火の為は人民の家居もあつたを許されども。余もこの河岸一面は竹木薪炭を商ふ者の置場あり在り。維新の際此も又火災の患なりとして。地を拂て取除らる。且家居も北の方へ十間をうり退けられて。以前も砂礫の空原なり。各所よ口を開く。低き石塙を四方より修理ひ中央に鎮火の神社を齋き。小樹數百根新栽したり。這裡往來隨意なれば。縦横十文字もつるもさらなり。或は丁字も行き入字も踏む。人字も路の着るも有繫も人の蹤ならま。其間ハ丹生出て。彼の淺茅生の小野とも謂なん。時とて

妻戀侘し。手飼の虎の卧所なる。古歌の姿の市中ふ有も。風雅り富る大宮人の計らをもあふより。自然も備はる趣きたる。哉是將近時門守る犬を殺して猫の野遊も便りを得させぬなり。余も鼠賊の多きも如何ん。此河岸寄は一個の物り。煉化石を亭を築建したる。火の見櫓。又は無層の塔。似たり。何ぞと之を人問へ。官省札の焼滅場なりと。嗚呼一回燔弄ぬ。其鈔數の百分を得ることあふ。吾曹生涯を安んじて。斯る拙著も耻を輝し。儲も貧乏の何か為る。本讀ハ世才あり。同く繁昌の世も在る。紙魚の宿世の貧窶も暮れも過去の因縁故。同く事でも西洋の本讀ハ凌兢き。世才あるも理あり。開化の間屋繁昌の本讀れば

亦も有ぬん

真黒美倉橋

和泉橋の碧圪より。東は黒色一條の飛空梯架りたり。此は神田の新橋今改まりて美倉橋と其已前橋北は官倉ありて因らる。美倉の即ち御倉あり。其後官倉なり。雖も芝口新橋あり。同字音訓の紛々さ。蚤く呼更ぬひより。叔藏の名は美倉遺りぬ。此も舊梁の廢され。新架の可惜良材を。黒く塗られ。又美あり。鯨皮もあらしむ。黒檀。黒珊瑚。少や有んむらんと見ゆるむらむら。足踏難。田舎の叟ハ遠巡の。殊は彼の親柱は橋名を標したる。真鍮を造り。字あれ。

光り四方の暉きく。日中北行すれば日は映ら。之が為は眩暈。秋の夜南行せば電父。相映して足下より。唾の雷公が發ると疑。一半髪を生之を評して。百眼が再出るとつら。傍の野凡人不審。點頭うぬ。再び解して口中一切薬齒磨きと謂ぬ。時好は晩。見立る。野凡あり。斬髪。當世人も察知難けん。此橋も亦下谷あり。兩國辺へ行く通路なれば。高賈戸を並べ。繁昌なること。和泉橋通も相同く。武家郎連建くる昔時。異なる。命は新橋の新。世風の今あり。温故の要なき。似つことも。其本を知らざれば。未覺末なき事多う。因て又按む。新橋も其始何人の架。を知られ。

和泉橋の後たうけん寛永圖の未と見え比美應二年の江戸
繪圖も這橋初めと見ゆども其名をうんどん橋と記したり
明曆圖の橋ありて名なし延寶二年の江戸繪圖も初てあるは
橋の名見えたり同圖も近年の昌平橋とも又うんどん橋と記
たり惟よつとらう橋と六橋名を撰て負せし名ありあつて
當時新らうき橋なりと斯も今方の一變したる美倉の新橋
とも謂を云をぬん

石砦淺草橋

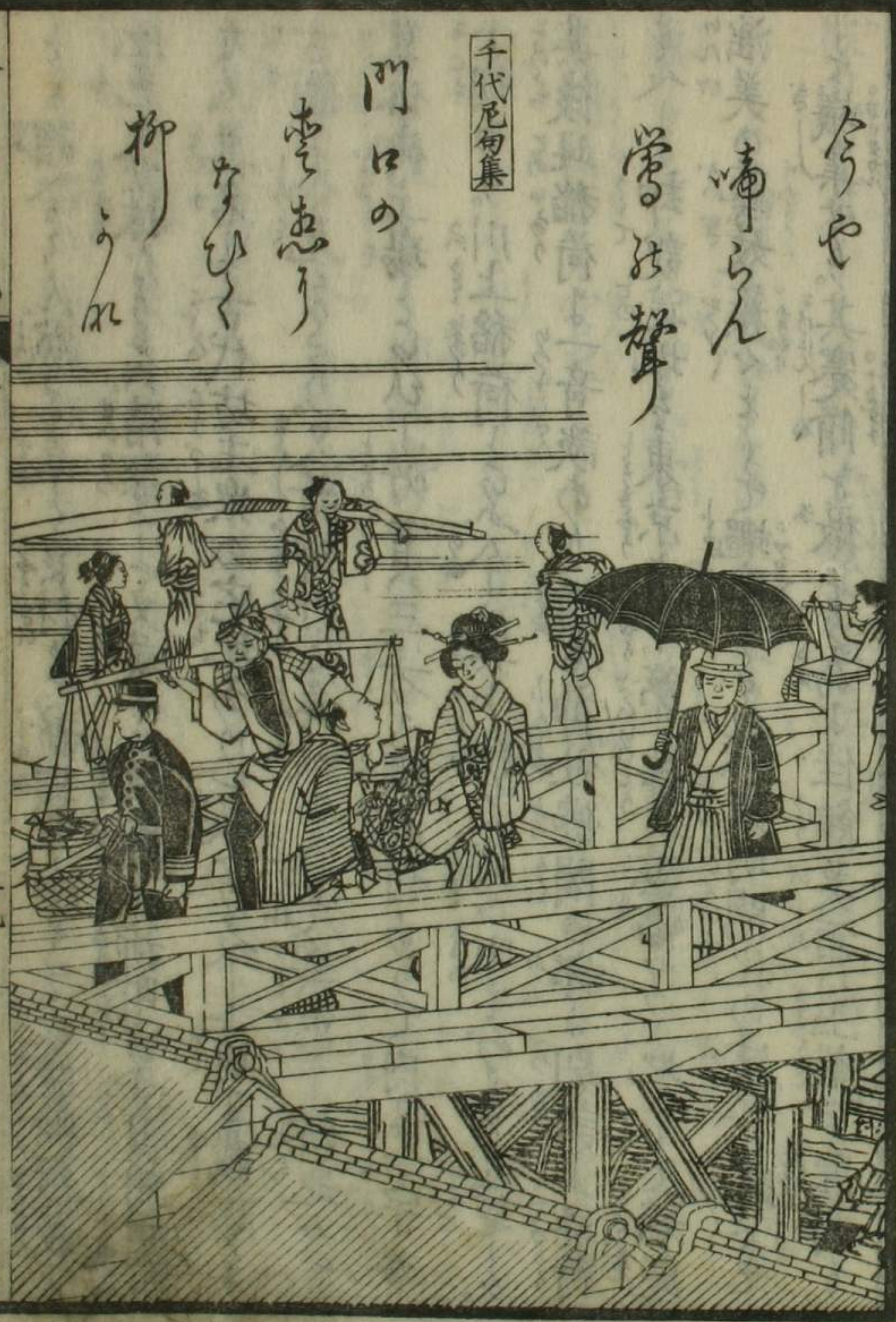
淺草見附の橋の名は昔より淺草橋なり筋違見附と同時
築て奥州路より江戸へ入る外郭の初門とす江戸名所圖會

曰く淺草橋も神田川の下流淺草御門の入口に架は此所
御高札を建ら馬喰町より淺草の出口ありて千住への官道あり
云々其御高札も今いそや跡方も無阿弥陀うあくなごころの美女
が為崩れぬ牆壁ありて崩れぬ外郭の石を以て此ありあつて
石砦一條を架られり全營萬世橋と相似とを俗人未と綽号を負せ
累石なれを眼鏡の形容を為さるるを俗人未と綽号を負せ
這橋の兩柱あり淺草橋と標記したる萬世橋の如く有あ
とど石工の異同の問を筆者も必と異なりと巧拙の
褒貶の衆眼の公評有ん帝伯仲と謂べきのそ此橋前
舉し如く奥州へ幾程も今も官道なりとせば往來殊

賑中なる。淺草道の繁昌繁華。新舊敢て異るべ。嘗變動す
者も。藏前の札差瓦解して。土瓦造の高屋ハ各棟依然として
とも。主人も網簾と俱に更りて。小賈雜鬻の店ばかり。厩河岸
の津口ハ。棚なす舟の楫絶く。方今橋普請の最中なり。其它の
大同小異記をばき者。尠らねど。此段も萬世橋の以東神田
川の一條なる。涯畧を尽すはありて。其他を問ふは違はるべ
況んや。沙草の觀音前後ハ。繁昌中の繁昌地なる多。景地
風俗異同あり。新奇流行珍説あり。其詳なる事ハ。編と重て
説ぬべし。

柳橋盛景

神田川の流を既にして。大川へ出んと。潮水相接する所は橋あり
柳橋と云ふ。這橋元禄以前よりハ。正徳三年の江戸圖に初て
見ゆ。其名柳原に因るあらま。武藏志料に曰く。柳橋も柳原の
末に在り。世に新柳橋と云ふ。僻事なり。是は異説あり。兩國の南
菜研堀に架する橋を元柳橋と云ふ。對して。いふと思ふ。悪し
此橋も難波橋と云ふ。此所へ往時兩國橋の在り。故元兩國と云ふ。
故に今の矢の庫へ行く所は。廣小路あり云々。是は去の舊の橋も。
近年彰義隊の乱起り。時油を灌ぎあんとして。燔陷さんとせし
りとも。左右して燃落ざりけり。其后暫時焼残りの危き。俟て往來
したるを宛も。蔡篋を畏るに似し。地俗は縁あり。焦尾橋



今や
啼らん
管絃聲

千代尼句集

門口の
さくら
かひく
柳
うれ



後撰集

妹の家
をひたり
多とね
ま柳よ

柳花

万八楼

とも謂へらん然るは早く良材を新架せらるる木質判然敢て
 他色の塗抹ならん六清潔なり又美あり橋南と元柳町と昔の同朋町
 なり。其名も古代坊主衆の宅地ありし故なり。前載し
 古圖は小見えり。又新柳町と喚做す。是築出し新地あり
 舊俗御上場と云ふ所昔ハ三方も柵馬行ありて内は一守の
 小祠あり。川上稻荷といふ。今ハ其小祠を南の町と云ふは移せり
 其後此稻荷は一奇談あり。乃ち神社佛閣の部は別記して發行
 せべ。却説這地も東京府中第一等の噫嘻なる地ありて娼艷
 淫美の藝妓簇々として蠅屯しんバ文明開化の才子綿々と
 して蟻集せり。其蹇脩を倣はる為は佳餚美酒ハ玉盤に陳列り。
○ヨリタカ

彼の竹も及ぶといふ。三弦の糸能く之を操る。然も肉も声も
 あらで両口も及ぶといふ。是を得ると容易ならん。所謂奥
 蘊なも六あり。然も富も誇り才も誇る。斬髮先生此も臨みてハ
 青州従事も官卑し。鱸魚を欲しんハ松江も未だ電信機
 の係らるるを恨む。蓴菜を覓めんハ百里も未だ蒸氣車の至ら
 ざるを歎む。抑此地の藝妓た。昔所謂江戸藝者の充巨魁
 と稱ふこと。今も於て猶然り。其衣裳装束ハ四方の藝妓が式所
 大約淡雅樸素なり。鮮華綺麗を取て工まじ其意色を賣ま
 あらで才を貴む。藝を鬻ぐ。故に權貴も憐むこと。意氣揚々
 として古の静微妙が白拍子の遺風専有り。欣賞せらるる

无^ろろ^ろを。近^{ちう}時^じ漸^{ぜん}々^{ぜん}風^{ふう}俗^{じやく}惡^{あく}弊^{へい}て盛^{せい}粧^{じやう}艷^{えん}服^{ふく}厚^{こう}化粧^{けしやう}と^と更^{さら}に
才^{さい}藝^ぎを貴^きま^まのむ只^ひ顧^こ犇^{せう}媚^びを務^{つと}め^めて家^か業^{ぎやう}專^{せん}一^{いつ}の道^{みち}具^ぐと為^なる者^{もの}
三^{さん}紋^{もん}箱^{はこ}より枕^{まくら}より。是^{これ}妓^きの非^ひを問^とふべ^べく^く近^{ちう}時^じ客^{きやく}風^{ふう}も
漸^{ぜん}々^{ぜん}惡^{あく}弊^{へい}て遠^{えん}國^{こく}楚^そ声^{せい}の野^や様^{やう}多^たり。依^より其^{その}好^{この}ま^まに應^おむ^むる^る飲^{いん}
蓋^{けい}此^こ地^ちも繁^{はん}昌^{かう}中^{ちゆう}は別^{べつ}格^{かく}の繁^{はん}昌^{かう}なれ^れば其^{その}景^{けい}致^ち情^{じやう}態^{たい}と初^{しう}編^{へん}
記^きま^まる^るも。曩^{なう}は柳^{りゆう}橋^{きやう}新^{しん}誌^しあり。這^{この}作^{さく}者^{しや}の幕^{まく}府^ふの儒^{にう}官^{くわん}且^{かつ}
富^ふ家^かなり才子^{さいし}あり。彼^{かの}地^ちも昼^{ちゆう}夜^や耽^{たん}臨^{りん}して能^よく其^{その}事^{こと}情^{じやう}通^{つう}
た^たば寫^うる^る所^{ところ}詳^{じやう}明^{めい}ありて。寫^い真^{しん}鏡^{きやう}も及^{およ}ぶ^ぶべ^べく^く吾^わ輩^{はい}寒^{かん}落^{らく}の
一^{いつ}賤^{せん}夫^ふ且^{かつ}貧^{ひん}家^かなり愚^ぐ人^{にん}なり。彼^{かの}地^ちは知^ち己^きの藝^ぎ妓^ぎあり。怎^い生^{せい}で其^{その}
状^{じやう}實^{じつ}を記^き載^{さい}ま^まる^るに至^{いた}らんや。然^{しか}る^るは版^{ばん}元^{げん}の主^{しゆ}人^{にん}萬^{まん}青^{せい}堂^{たう}彼^{かの}地^ちの景^{けい}色^{しき}

を頻^{しん}に欲^{よく}して本^{ほん}編^{へん}よ^よ必^{かなら}ず^ずも加^かへ^へと求^{もと}む^むを遊^{あそ}戯^び所^{ところ}為^なら
辞^じひも^も衣^い飯^{はん}梳^す買^か人^{にん}の有^ある^るを。船^{ふね}間^まこと^と不^ふ景^{けい}氣^きあり依^よ
茲^{こゝ}に至^{いた}る^るゆ^ゆら。近^{ちう}日^{じつ}復^{ふく}柳^{りゆう}橋^{きやう}新^{しん}誌^しの二^に編^{へん}世^{せい}に發^{はつ}行^{かう}せり。愈^い々^{ぜん}と
口^{くち}開^あく^くこと能^{あた}ら^らず竊^{ひそ}に其^{その}書^{しよ}を閱^{くわん}する^るは初^{しう}編^{へん}の稿^{こう}に既^{すで}して一^{いつ}昔^{しやく}前^{ぜん}
か^かも六^{ろく}厭^{えん}后^ご柳^{りゆう}橋^{きやう}一^{いつ}新^{しん}せ^せる^るを未^{いま}だ好^{こう}事^じ家^か其^{その}新^{しん}し^しを記^きま^まる^る者^{もの}あ^あ
ざり^り。頃^{この}日^{じつ}我^{われ}が柳^{りゆう}橋^{きやう}新^{しん}誌^しを偷^{ぬす}に刻^{こく}する^る者^{もの}ありて。風^{ふう}流^{りゆう}子^し弟^{てい}
多^{おほ}く買^かひて之^{これ}を讀^よむ。余^あ此^{こゝ}維^い新^{しん}の日^ひも方^{あた}りて。彼^{かの}の既^{すで}腐^ふの書^{しよ}を讀^よ
む^むあ^あとを慨^{あは}れ^れて作^{つく}ると云^いふ。余^あも有^ある^る余^あも候^{まう}は。石^{いし}火^か光^{かう}中^{ちゆう}
自^こ他^た平^{へい}等^{とう}口^{くち}を開^あいて笑^{わら}ふ^ふく難^{なん}波^なの蘆^{あし}の束^{たば}の間^まも。有^ある^る為^なる轉^{てん}變^{へん}の
世^よ俗^{じやく}十^{じゆ}餘^{じゆ}年^{ねん}間^{かん}依^よ然^{ぜん}と^と者^{もの}豈^あ都^と下^かる^る多^{おほ}く^くらんや。既^{すで}に昨^{きのう}日^{じつ}の柳^{りゆう}橋^{きやう}

新誌と今日余が此稿も彼地の風俗動靜云為出沒風衰早異之
 彼書は柳橋新誌二編を河長梅川盟を稿の南北は争ふといふ梅川
 既衰へく其亭宅ハ依然として也。割烹の烟絶て近時升が家を
 一貴人贖ふ樂所よせり。河長橋北萬八上亀清柳屋ハ將衰
 類の氣を一振もや否今も猶存せり。柳光亭橋北生稻柳橋新誌
 是ハ柳升亭の黄字大橋の若き今猶雄を競ふ有信亭松中庵の奇を
 以て鳴り止む柏屋青柳の河の東あり。深川亭ハ廣小路の南あり
 共此地も予らね。本編も省て評せ。巴屋ハ大代地も在り。橋
 主人も今の易牙の由余ハ例の貧生も其臭味を知ること能は
 狗の川端も外面あり。出沒を見り記し程。那犬殺しは過て

擊殺されぬ僥倖の。割烹の可否論ト難。借船宿も今も現存
 の家名を悉く左に挙る。彼書と有無を以見ぬ。其沿革を
 知るよ足るべし

- | | | | | | |
|--------|-----|--------|----|--------|----|
| 松葉屋岩次郎 | 十六麓 | 飯村屋 | 同地 | 藤本幸次郎 | 同地 |
| 若竹 | 同地 | 吉川平助 | 同地 | 三河屋清三郎 | 同地 |
| 中村屋 | 同地 | 伊豆屋庄兵衛 | 三麓 | 日野屋藤兵衛 | 同地 |
| 上總屋長右門 | 同地 | 通計十軒 | | | |
- 各屋柳橋通る。元柳町の両側も有り。同所も參會茶屋河内
 屋半次郎有り。待合茶屋は福田はねあり。蒲焼は鮎屋治郎吉
 あり。前も奉る。亀清柳屋大橋並ひは茲も有り。吉川町附(曲る)

箱屋トコヤ一岡崎屋竹藏あり。橘屋吉五郎あり。こまハ藝妓の箱トコヤ菓子屋菓子屋は茗荷屋松造あり

丸屋ささと廿七番地相模屋定吉廿九番地崎玉屋させ同地

信濃屋三之助同地三浦屋ささ同地通計五軒

各屋も元柳町の裏河岸も有り。同所も待合茶屋伊勢屋トコヤあり。あひ鴨鴨川半あり。川上稻荷の守護人波屋與八あり

山田屋ささく 升田屋平六 通計二軒

件けんの二家ふたけの近頃新柳町へ轉まわりたるなり。以前いぜんハ柳橋通りりて山田屋ハ十五番地升田屋ハ十六番地ちんちも有り。其升田屋の舊宅きゆうたくも今いまも天麸羅茶漬てんぷらを開舗ひらき。仄ひそく聞きく三谷堀みやうりて高名の

老藝妓らうげいき鮎立あなたちの小方こなた此こゝに在あり。未いまだ詳つなからぬも乃すなはち升田屋のぼりり舟ふねのあり。且かつ挽焼まきやきといふ柳升亭りゅうのぼりの生箱なまばこも這主人このあたの這地このちに待合茶屋歌澤貞吉あり。菓子屋菓子屋は小川玉齋あり。蕎麥屋そばやは花外はながい庵あり。件々けんけん此こゝの稿こうしつしつも。今いまより四五ヶ月ごを経へるもあらむも本編ほんぺん刊行かんこうの成難なりがたなり。其時復そのときまた怎い生まるも為ならん。或あるハ後家ごけは接脚夫せつかくとあへく。或あるハ息男いきをとこは讓あるも有あるも。或あるハ過房かりやうを迎むかへるも何なに々々。或あるハ新娶婦しんしよも出来できあらん。火宅かたくに住すむ人ひとの世よハ生なまま者もの必滅かならず會あひ者もの定離おぼ目めより露つゆの敢果あるも思おもはるも債うの有あるも限かぎり。歡たの楽らく尽つまま上う分別べんべつ跡あとの野のとかなも大和屋おほと古風こふうは讚あるも美人びじんでも自由じゆうの權けんさま吉きち凶きようともも笑わらふも暮くるも開化かいの人ひと是こゝを繁昌誌はんしやうしの

得意と謂ふ



東京開化繁昌誌第二編卷之上畢



東京開化繁昌誌第二編卷之下

東京 萩原乙彦著

柳橋藝妓名表

柳橋の土人常は謂らく。白魚が上まの藝者が下ると一言以て能く
 状情を貫けり。野奶の為は解して曰く。白魚も此地前川の名産なり。
 此魚初め近海も生どる春暖も随て川上も櫻咲く頃ハ宮戸川を
 浅草の上りて向嶋の下に至り。葉櫻の時の綾瀬も遍る。這地及び三谷堀の
 下
 藝妓の花の時を盛りとて花散る後の閑あがり随て柳橋も
 川びらもよ近づきて一年中の二盛時と依り向島及び堀の藝妓は
 多く柳橋も假居をとりて客を迎ふ是を上手より下るとなり。

東京開化繁昌誌 第二編下

乃ち白魚と交替まうこと。雁と燕のどと。一時の通言も繁昌の
 餘興あり。又知らずんば有べからず。介と其上手より。下りたる者と
 除きて。當所土着の藝妓とのと。悉く左も舉り。方今孰とも盛聲
 あらん。其妍媸ハ天稟の幸不幸も係る所。其盛衰も時運の有無の
 勝吉春吉ハ元柳町一番地あり。小雛長吉阿鶴阿梅ハ同二番地あり。
 大王小政房ハ同三番地あり。阿柳阿瀧阿富貴ハ同四番地あり。
 阿万阿年ハ同五番地あり。小筆鈴八雛吉阿里阿三ハ同六番地
 あり。小春小久小露席助阿鏡阿花ハ同七番地あり。三代吉菊治
 阿半阿栄阿鶴ハ八番地あり。徳治房吉阿兼阿千阿幸延綾延
 早ハ同九番地あり。小蝶小メ磯吉樂助阿春阿作阿組ハ同十番地

もあり。氏糸小糸阿較阿鯉阿幸阿金ハ同十一番地あり。萬吉福松
 才吉阿茂ハ同十二番地あり。阿照ハ十三番地あり。梅八島八浪吉
 小徳ハ同十四番地あり。阿富士ハ同十五番地あり。萬吉ハ同十九番地
 小あり。八八三吉小染小種小蔦阿久阿幸ハ同廿番地あり。阿石阿稻
 阿色阿赤ハ同廿一番地あり。阿梅ハ同廿二番地あり。藤吉も同
 廿三番地あり。米吉駒吉ハ同廿四番地あり。竹八延小栄ハ同廿五番地
 あり。大金小藤阿千代阿俊阿兼阿金ハ同廿六番地あり。鈴吉小糸阿清
 阿勘阿縫ハ同廿七番地あり。幸吉小六阿植阿岑阿光ハ同廿八番地
 あり。小金三八阿末ハ同廿九番地あり。阿重ハ吉川町壹番地あり。小今
 阿満阿八重ハ同三番地あり。小鹿阿文阿福も同四番地あり。

馬喰町通り

田

元石垣ノ跡

元柳町
三十二番地

横山町通り
西國廣小路エ

川	吉	二	一
六	五	四	三
番地			

田

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
番地										

元 柳 町

同

廿九	廿八	廿七	廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	二十
番地									

田

町	七	八	九	十

元

十二	十三	十四	十五

十九	十八	十七	十六

裏 河

廣 小 路

元柳町
三十番地

同
三十一番地

新柳町
一番地

新柳町通り

新柳町
二番地

同
三番地

梅田川合

柳橋

大川

西國橋

小雪へ同五番地もあり。阿濱阿輕小輕へ同六番地もあり。小亀へ同九番地もあり。阿組へ同十番地もあり。阿園へ新柳町二番地もあり。已上通計百十名。當所へ第一大區十三小區もあり。茲は地圖の番號を録したれを。各名住地の番號を比べ。ムも表町。ムの裏河岸なるを知べし。件の藝妓の當區あり。鑿札免許の根生と謂はん。這它他所より當所へ假居して。同ト生業を倣は者多々。并に盛衰は依り出沒不定。一朝の萍花中にて。謂は出稼ぎ藝者あり。茲は省に記さるるもの。風流才子ム々の戀名脱落と訝べらば。蓋此地の藝妓が情態余曾て味つねども。哥人の居あがら名所を知り。佳人を在るがら迷所を知ると。自ら許して寫さん。倣得べくも有らば。

彼柳橋新誌の糟粕を嘗らん。有繫あり。姑く事を彼書に譲れど。其既も後とくる。流行の補と為さらんや。せよ柳橋新誌を讀て。右這條を看官へ。今日の盛衰を感ぜよ。這條を讀て。後柳橋新誌を看官へ。昨日の盛衰を歎ぜよ。嗚呼翌日へ又此地より。王輿に乗る楊貴妃あり。或は芝のムと。奔る卓文君もあり。造化の好没定め無き。是も繁昌の時俗あり哉。

書畫會

書畫會の光景は。江戸繁昌記に尽し。今は大抵異あらぬ。之を記し。事舊し。又更ニ維新の趣き。元きあり。も非ざる。其書は曰く。當今文運の昌ん。文人墨客會盟して社を結ぶ。

人苟も風流胸中黒主あり。才徳並び具る者。一たび盟は與まらば。
 衆推て先生は拜し。聲四海に流し。溝澮皆盈つ。油然の雲肺然
 雨人の欣慕せむる靡し。中其地多し。柳橋の街あり。萬八河半の
 二樓を以てせ。會は先づること數月。日とトして一大牌を掛け。書
 して曰。晴雨も拘らば。月の月。日の日。を以て會せ。四方の君子願臨と
 請ふ。且大書して先生の姓名を掲ぐ。云々天保の初年既ありし。と。
 文事の盛行此のよし。況て文明といひ開化といふ。方今の文運
 盛ある。豈天保度の如くあるんや。故は彼万河の二樓。狭小の非
 されども。聚客を容るるは足らばとて。多く兩國橋の東あり。大中村の
 高閣を以てし。柳橋の船を布の中村にあり。お人大字を加へ別ちとあり。 文事を好む者の昔日より。

百倍せむと推し。知るべし。彼の會盟して社を結ぶ。云々とある者。當時文
 事を衝鬪して自ら大家と称する先生相談して黨を做し。親疎も拘
 らば會前人情を做さる。臨席せむと議し。一會を開く者先
 這隊は事を問ふ。如此らされば當日の席上不如意ありとある。肝煎鍋
 とし。小冊は。其事情を録たり。方今くる野凡を為す。先生家には
 ねども。長少あり。巧拙あり。隨て盛衰あれば。未だ名聲普くらば。
 俗よりの初幾先生より。宜名なぐらの一會を開く。飲むる者。ハ
 未發以前は各家を訪て。首を頓うするとの。順あらずれば。宿意
 を含む。先生家元きよあ。ね。又席上不如意ありて。盛大を行
 せむ。加旃を報條に借る。補助の列名も位次を正して。巻頭

卷軸中軸と稱へ長少の分を立つこと。宛も演劇の戲單なる。役人替名の次第一齊く其論姑息も出るものなり。各家の面色尊大あり。將も也肝煎鍋の再煮を啖まんは是も繁昌の餘澤あり。又彼の會は先づ二三数月日をトして一大牌を掛く。云々と稱者へ今も沿習して之を倣し。更に加飾して高大なる。建招牌は各造りて。中村樓の外画は。第一月より五六月に至り。三四牌若くは四五牌建掛と有らざる日もあり。ト日孰も一六あり。誰り知らん官員の休暇日。書畫會掛りの物日あるんとい。却説席上の動靜云為。江戸繁昌記の昔も変らば。當世風の異あり。當時曾く無き者あり。蓋中村屋の大厦高樓は。近年祝融の災後

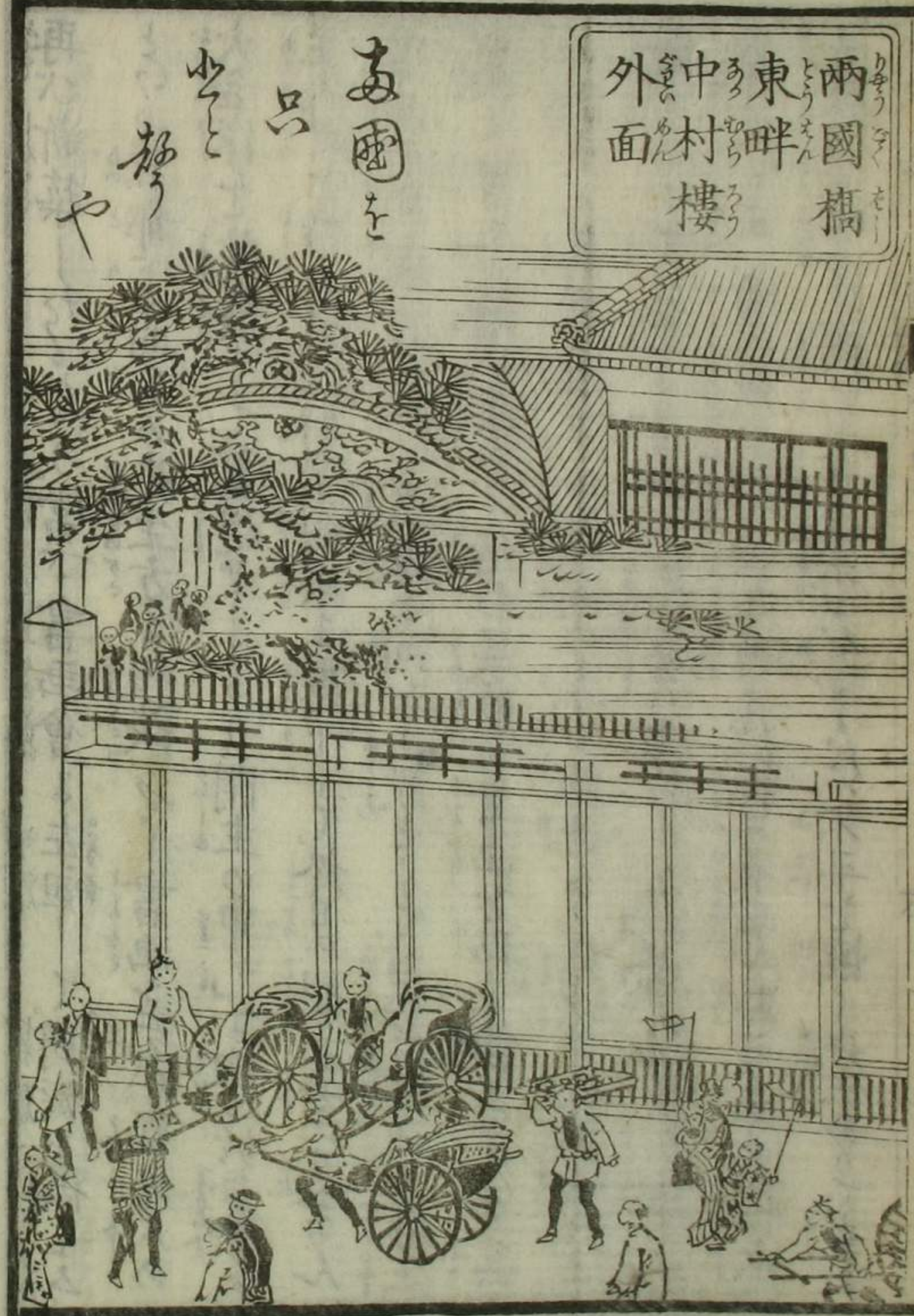
再び新築したるなり。當下書畫會は左袒して。周旋を倣す。といふ者。都下高名の先生方。相談多く書畫を乞ひ。幅九尺の大合作を裝潢して賀送せしあり。開主の甲乙は拘らば。每會は主人之を惜まば。本間の二間床も懸下して。終日の觀も具ふ。是れ書畫の新製といふべく。其床の間を上段として。百餘疊敷の席上四面は。會主が請ひ集めて。所の展覧の書畫を貼し。餘も其外面あり。薦席廊下十数間の左右餘地も貼次して。猶餘れる。數房の小室に至る者あり。這小房は豫てより。別席の標示を出して。大先生方或は貴人。或は二列の同居所と。此の展覧を貼するも。位次先後の論喧々。尚已が書畫未も有ると。此の不平を懐く先生ありて。事は

飲者天地
間第一韻
事詩家不
可缺之政
也

右
魏寸
對梅



兩國橋
東多東
中多東
外多東
面多東
樓多東



多東
少東
也

假托^{かりかた}為^な障礙^{ざいがい}者^{もの}あり。是^{こゝ}ハ自^{みづか}許^{ゆる}の慢^{まん}心^{しん}より生^うむ。自^{みづか}ら驕^{おご}る未^{いま}しき。
世^よ評^{ひやう}自^{みづか}ら定^{さだ}位^ゐあり。尚^{なほ}己^{おのれ}が位^ゐ次^{ついで}己^{おのれ}が意^いより下^{くだ}りしつゝ。己^{おのれ}が藝^ぎ
の未^{いま}しき。世^よも知らざらざるを。知^ちりしつゝ。愈^い勉^{めん}勵^{れい}もする。及^{およ}び。故^{ゆゑ}に曰^いく。
人^{ひと}の己^{おのれ}を知らざるを。憂^{うれ}む。人^{ひと}を知らざるを。憂^{うれ}む。又^{また}一個^{いっごう}の先^{せん}生^{せい}あり。
膳^{ぜん}札^さは有^あ札^さを副^そく。與^あつざるを。不^ふ足^{そく}の懷^をひ。會^{かい}主^{しゆ}が馳^ち走^{そう}の酒^{さけ}。醉^あて。
終^{つひ}る。其^{その}野^や鄙^ひを吐^と露^ろし。怒^ど聲^{せい}を發^はつて。罵^{のの}る者^{もの}有り。竊^{ひそ}く其^{その}情^{じやう}態^{たい}を
推^{おし}量^{りやう}する。展^{てん}覽^{らん}は贈^{をく}る所^{ところ}の揮^き毫^{ごう}を自^{みづか}ら一分^{いっぶん}直^{ちよく}と。加^かふ。賀^が金^{きん}
二十五^{にじふご}錢^{せん}を呈^{てい}して。饋^{くゐ}札^さを與^あへざる。吾^{われ}を輕^{けい}侮^ぶする者^{もの}有り。白^{はく}の會^{かい}主^{しゆ}の
鄙^ひ吝^{りん}あり。孰^{たしか}か。不^ふ愉^ゆ快^{くわい}と。是^{こゝ}に己^{おのれ}を省^{しやう}む。醜^{しゆう}を他^たに示^しす
者^{もの}あり。故^{ゆゑ}に曰^いく。君^{きん}子^しハ其^{その}獨^{ひとり}を慎^{つゝ}む。彼^かが書^{しよ}画^が未^{いま}しき。愛^{あい}玩^{わん}は足^あらねども。

之^{こゝ}を展^{てん}覽^{らん}は貼^はり。俗^{よこ}の枯^{かれ}木^きも山^{やま}の賑^{にぎ}々^々。習^あ音^{おん}ハ虚^{うつ}空^{くう}无^む用^{よう}之^{こゝ}。
愁^{あは}ひは唐^{たう}紙^しなも。反^ふ故^こあり。為^ならば後^{のち}終^{つひ}は。敗^く楮^{しよ}筆^{ひつ}より移^{うつ}轉^{てん}して。
還^{かへ}魂^{たま}紙^しの料^{りやう}とあらむ。介^{かい}も之^{これ}を贈^あり。之^{これ}を謝^{しや}す。主^{しゆ}客^{かく}が間^{あま}の
至^し情^{じやう}の。尚^{なほ}その人^{ひと}情^{じやう}を打^{うち}弄^{ろう}て。算^{さん}玉^{ぎよく}盤^{ばん}を。論^{ろん}む。初^{はつ}に配^{はい}物^{ぶつ}の
扇^{せん}子^しあり。袋^{ふくろ}とも二^に反^{はん}。舊^{きう}稱^{しやう}の銀^{ぎん}目^め。此^{こゝ}の字^じハ錢^{せん}の畧^{りやく}字^じ。介^{かい}も錢^{せん}も。尚^{なほ}
手^て拭^ふを染^そめて用^{もち}られ。包^{つつ}紙^しも一^{いつ}朱^{しゆ}。同^{どう}燒^や附^つの鐘^{かね}の下^{した}等^{どう}あり。綸^{りん}子^し
服^{ふく}紗^さの上^{うへ}等^{どう}あり。姑^{あは}く措^そく。偕^{さい}當^{たう}日^{じつ}の膳^{ぜん}札^さ有^あ札^さ俱^ぐは一^{いつ}朱^{しゆ}。之^{これ}の定^{てい}價^げ。
半^{はん}日^{じつ}間^{かん}は喫^くむ酒^{しゆ}。五^ご合^がかん。即^{すなは}ち二^に朱^{しゆ}なり。且^{かつ}席^{せき}上^{じやう}は羅^ら列^{れつ}する。
饋^{くゐ}數^{すう}盤^{ばん}數^{すう}器^きあり。啖^{たん}ふ。隨^{ずい}意^いあり。那^な方^{はう}を啄^つき。此^{こゝ}方^{はう}を狹^{せき}む。
這^{こゝ}分^{ぶん}見^{けん}積^{せき}り一^{いつ}朱^{しゆ}と。一^{いつ}分^{ぶん}朱^{しゆ}と。二^に反^{はん}なり。加^かふ。酌^{しやく}を藝^ぎ妓^ぎは

採ら。履の下足も任。帽其它の持物へ。衛刀所は預けし心を
 安。傍酒を監する者あり。故。冷熱の憂なく。茶を令する者
 ある。故。湯候の宜しきを得。這者共。日雇賃銀併。席亭の
 坐敷料。开。奴婢十数人の奔走料。彼是を通計。合して凡そ
 幾許金。是を當。來賓の幾百頭。割附。一人若干錢。直るべし。
 斯。一客二分米の掛。所。顯然たる。百匹受。指引。南。鏢
 一片。古。會主の減あり。依。有札を與へざるも。減の半を扶くる。僥倖
 あり。沙量。あれば。足不足。无きを以。有札を與へぬ。米
 餘りと補。あ。の。輕少。あ。り。茶素を具。雲脚。土瓶を
 充。會主の所得。幾許。有。是。以。世情。通。才人君子の

席へ臨む。朱提の儀。必。五十錢已上あり。倘。百匹の折。乾
 る。使。齊。入。托。贈。畢竟。賀金。會主の
 為。之。呈。所。已。酒食の料。非。然。林園生の
 卑劣文人も。二十五錢の賀儀を以。半日餘りの歡を尽。甚。ど
 した。過食。人前。も。憚。雑化店を。あり。其野鄙
 醜態。厭。是。文人の。倍人。亦。殊。極。め。く
 甚。賀金。二。米。呈。備。酒食。飽。歸。者。今。の。米。の
 舊時の幾干。小銅錢。今。の。二。重。銀。一。文。銀。算。僅。百。廿。五。文。分。
 當時。矢。大臣。の。代。價。の。時。下。賤。の。輩。賣。酒。屋。一。飲。多。を。矢。大臣。の。或。ひ。の
 飲食。を。隨身。門。の。俗。の。云。ふ。斯。ま。ど。時。世。は。疎。り。け。一。堆。の。牛。糞。見。何。菴。を
 矢。大臣。の。形。の。肖。る。る。べ。し。

嗜めんとて生涯大家の成難し。又憫むに堪ざる哉抑書画會を開張
 せり。大家と雖も欲する所集金の意元なき非也。故一人之を評して
 外飾風流内實野鄙。實は公論を以て云へば會主の頗る賤しきこと也。
 僅二十五錢を以て書画を貪り。酒食を貪る。客意も亦貴うらんや。
 曲庇の批をべららば。凡そ世用は景必あり。世事は公私あり。物差別
 なく。真直は為んと欲する未用なり。への字形は閑化のあへず。善會は
 三難客あり。展覽の位次を論ぶる先生。有札を欲し。先生飲廻して
 醉倒する。先生是なり。又三等の賓位あり。一名二圓以上を呈せしむるを
 上等の客とす。五十錢以上と中等の客とす。二十五錢を下等の客とす。
 二朱の會主花子。施志を以て扱ふる。主意斯のよくあれは少し也。

集金の多きを欲し。來客群來を希望して。餘興は碾煎西茶を具ふ。
 是は客を款待態の厚きを以て雅致あれども。世は陸氏盧氏多うらね。
 清味を喫し。分る者あり。徒らに費すもの。又七曲の合奏あり。姐在房中を
 唱ふ者。田螺の似く口を閑く。真唐人の寐言を暗き。月琴を彈む者。六
 兵兵兵の律將。是昔流行。カウノウ。聴く者心耳を清ま。稀めて。
 適興も棄むる者。ハストコ踊を為んとす。又淨瑠璃あり。長唄あり。鄭聲
 樂を乱すと雖も。亦今俗に協する。鄭聲も亦閑化の樂あり。下里巴人と
 賤しむ者。世情不通の廢人。狄寧唐音の兵兵兵とあり。俗を和せんと
 三強も及む。又追福會の空也念佛あり。南無阿陀。あめりごとか。と
 唱名打鉦し。つゝ巡る態。各俳優の氣とりあり。悉皆 帝都の繁昌あり。僻地

山間の婦女童蒙の夢やも知らざらん之を弾きて不風流と一或不見識と賤む者ハ時勢をあらぬ野凡人也。然其事情を登る者ハ世用より才子なるべし。這段僥倖薄俗の愚論を挙ぐる理屈は似れども開化不開化の常情なる乃ち繁昌の樂房といふ會席上の盛事は於此是の舞臺の光景也。彼繁昌記に譲りて記せば曾て聞く昔支那の西園雅集蘭亭の逸會ハ是眞の書畫會也。各家の折乾を受きて計る。冥冥の書畫會ありむや。とをうりやと慕ふとも。開を做して賢者の否とを實に文明の時也哉。今茲第四月十日尚齒會大盛事あり。家父秋巖も古稀を越て既二歳之病あり。其尊招を蒙りまると。薄命ゆて去年の夏重き病着の後弥衰つて起居

名尚齒會

本月十一日午前十時開筵於山石川丸山街
舊平園邸今加納氏別業致友之在
前之梅花記方好之體俟其熟老
先生不問兩賜不吝玉趾惠臨幸甚

不自在なりけれハ遺憾恐縮と云ふを堪難く辭ひ奉らぬ其招帖左の如し

東京毎日 二卷下

十一

甲辰夏月

催主 勝海舟

幹事 福地清

秋巖老先生

本日参館の書畫老先生各大絹本キヌチ揮毫あり就中大槻磐溪大先生其首を題して曰く

明治七年甲戌四月十一日海舟勝君與鳴鶯福田子謀大張尚

齒之會於城北加納氏紅綠山莊是日春雨冷澹林花紅温名園之勝極泉石清幽之致而皤々十二老鶴髮霜鬚相會於一堂文字之飲兼有紅裙之伴淋漓酣暢飲然終日人車各扶醉而歸洵熙朝之樂事太平之盛舉也崇也老朽亦以七十四與焉不堪欣幸聊賦一絕以紀實其詩曰
學問文章持世道風流書畫進才科欲知聖代開明運看取藝林人瑞多
盤溪大槻憲識於愛古堂中□□

秋巖も件の壽宴に列あらねども合作に脱まへるべしと命せらるる其絹本を齎せらる依て之を拜見せり其既落成の書画八十歳南溟七十八歳の正齋七十二歳永海七十一歳の遂庵四老人あり其它誰々

ありと知りば是れ真の書畫會や。彼蘭亭西園は譲りて蓋樂天が九老路公若英の二會は伯仲と謂ふべき。寔は聖代の一大美事なり。其後又聖堂あり。新古書畫展覧の開館あり。官庫の名幅諸家の珍軸出品數萬千種あり。且現今の筆者より。王右軍楮氏懷素王摩詰李氏米南宮。再来らん書畫大先生の姓名と諸とも。咸其目錄に細載したる也。此は名状まづらば余が父子は朱引外なる。黒子の窮里に幽栖たれば。衡門鎖して蹄轍を。世は交ると疎く。博覽事務局より命せらる。執吏の甲より傳告あらば。斯る盛事を毫も知らば。御開館の半村翁の噂は初て聞くと。官命もなく乞人もあらず。高自標許して父子が書を捧んとの惶々れば。

今般の列は省々々。都書畫會の盛んなる。官本既よ此のごとし。文人墨客是 大御代を拜戴し奉り。疊々として業を磨き。晋唐名象を壓倒して。皇國の美體を輝かす。時として爰を得たりと謂ふ。江戸繁昌記中書畫會の後載て曰く。扇面亭某父子。風流相承け。並に會儀に閑ひ其格式は達也。故を以て集會を謀る者。皆先就く質也。云々今猶然り。當時の子。今茲八十二歳の老翁となり。其子箕裘の業を襲ひ。家聲愈佳を稱へ。四方の愛顧淺く。らば名を全太郎と稱し。号を汶阿弥と稱す。鶯く所の扇面一ツ。年十方柄。下らばを。居ハ博勞街の魚店。少て麿の開口二間。是らば曩祖開店の其始。當地をトしたる質素簡約な。

して能く守る者ハ子孫の安堵を慮るあらず。介はバこそ其先祖
長井傳四郎ハ下總より享保の末は江戸へ来て今の住地を居とし
平野屋と称しより。茲は七代を重く。世譜畧記左の如し

扇面亭初代傳四郎

事ハ前ニ載り
二代 初代実子代傳四郎と云
安永五年八月十八日没享年八十有九
天明七年六月二日没

三代 二代養子

寛政元年八月廿五没

四代 三代養子

文政六年三月廿日没

五代 四代養子此代初代書画會ノ管事

始ハ天保四年七月廿四日没享年七十四

六代

五代実子今ノ老人ナリ
今日猶壯健

七代

六代男今茲年三歳
性実直ニテ能ク世情通

初編の群鶴本編の扇面亭累代盛業都下は稀なり。且長壽の
家瑞あり。開化繁昌の世室とす

人品四等

開化の人品四等あり。華族と士族と。卒族と平民と。華族と

至て貴くして上等あり。平民ハ至て賤くして下等なり。這貴賤を分つと。
敢て才不才を構らば。又學不學を論む。士族。華族と稱す。家富主の
屋は生るれば庸愚も貴く。平民より家蕪主の屋は生るれば賢才も
學術も賤し。蓋華族ハ維新前なる。公武混じて俗ものか。
閥閥の稱へて。有役非役を構らば。各從五位已上なり。又童蒙が口吟
と。物あはびとの門徒の五派改稱して。真宗の信なり。謂べらむ。
其本山も三年前這等は列せられ。幸民中の幸民と。雲上の姑ら
論せば。大名の華族衆ハ国主城主の甲乙も隨ひ。所領を奉還せられ
し。其十分一を賜りて。東京に住めり。爰は於て好地を多らみ。
美邸を修理し華園を造り。合春と安全。無業閑富の樂隱居。

乃ち遊民の魁首あり多む。一館の俳優封間音曲の徒藝妓の輩。朝あ夕あは出入。一館の文人墨客。其將茶茶人俳諧師夜と日とを身降せ。又一館の其隊なる部下の拜趨をも厭ふて。獨古き狂歌の如く。一ふらふ後は肴酒酒友右女懷中。黄金とて原来澤山あれ。冷るが故肉蒲團用たのき。俵よとめれば。二指一莖を濡らして。終は隱居が腎虚と變下。自由の身を得。程もなり。忽地も改名して。其院と成るも有り。或ハ神官に依頼して。其終神も成るもあり。又一館の件の類を竊は未閑と嘲笑して。商法を専務とあり。彼の賤き平民と交潤利を争へ。惡死いある。最仕。甚むと懲りて再び手も出さば。曖昧とて日を経る大く損失せられ。

あふ。老侯斯の如くなれど公子の勉勵して。莫大の学費を齎ら。西洋留学と既興業これ。躰て學術成就して。帰朝しぬら大官に任ぜら。まんと思ひきや。一個の狼運貪の。英國の都或ハ倫敦よ作る。元來字義あり。業平と倣り。女まのあひ。一個ハ巴利樞の。フランスの都。助六と倣り。とありのりて。其國語の通知。これ。景必一道も貫る。可憎自國の金銀を遣ひ散して。他國の有と倣。手振編笠よあらな。辛くも帽を弄さる。國は飯りて役も立貴介公子の甚だ勤。斯くも十分の家禄あり。且居邸に其俵。一所の何番地と成る。家中の空房を幸ひ。入口と外面。修理ひ武若。窓を出格子とて。貸店數軒の居亭主人。毎月家賃を收納し。其糞汁を副管せ。己前の大家が所致。一般大家或ハ家主と云多。くハ。

大小の橋を伴って貴族
市中を逍遙の圖



雅庭醉狂集

か
より
らん
丸
年
之
よ



性の鄙劣き者ゆへ町方をして陰誦して大家根性の称へあり。豈計ん
已前の大名已前の大家よ為らむとハ斯き去年禄税の減石有るも
未だ憂う足らざらんが家事を任する家令あり。及び家扶あり。家從あり。
家令の忠直なり。石鱈とも。然も至る多うらひ。錢をかり鱈も
頗る多し。其妻の女は鱈。家扶の家令より下ら懸。但焼麩
輕々と能く奔走する者ハ主は使役せらるならで衣食は使役せらる
あらま。家從の家獸。君前。尾を揺るもの。極る所ハ已に食ふ
こと。注意するもの。是繁昌の基。當飼扶持の之餘。禄が無るも
藝妓の纏頭も遣り難く。他女を抱ても寐らむ。況んや其妻娘を將て
戲場へ行難く。第一男が月謝を持て。洋学所へ通ひ。古き

世諺。傳らる。君を思ふ身。想ふ。慾が无るも窮屈。主人
を首に戴き。誰趨從するものあらん。介も。這人情を解て。
万事寛恕。見て過る。有繫。今でも大名や。世の人。毎
感賞。然も。勉めて苛密。下輩。與る。朱提品物。菲薄を
極め。愧ざる。世情。通せり。介も。大名態の。いま
脱ぎ。隨多う。是。其身の貴きを。省する。所。乃ち
開化の新弊。下ぎぬ。彈き。或ハ鄙吝と譏。或ハ
弄大名と賤し。或ハ大名面と嘲。惡陰誓なり。と。賤く
して貴きを。凌辱。此の如き。無礼の甚き。と謂ふ。是
無礼の國の凶賊なり。糺明。于らぬ。文明治風の僥倖。是

繁昌の一條あらば。其大名面とりの怎生なる顔と思の外敢て人
 異りたるおん顔も在まらば。惟も大名ツラとハレの相通大名連の
 轉語也。大名の御連中といふところあや有んもむ。其本行大名といふのも亦
 腰ぬけあらば。況や跛子も在まらば。年杪若く俗に謂私臬も妾を右
 ゆ。何為粧ふても破瓜の過と。見ゆるをくりは春色の満る。妾を又
 左ゆ。熨前驅と云。歩と云。熨とカメと訓。私説は非也。史曰。周武成德遠。陽
 犬高。四尺。葵と云能。人心と知。捕捉せしむ。若者云。周尺。適往來途絶る。陰路に至りてハ
 四尺。今この曲尺二尺。寸餘。今俗カメと呼ぶ。洋大此葵をて心せ。手
 手を引とあり。市中の兒女が戯。盆々を謳。盆々を謳。如し。是ハ西洋の
 翻譯書。或ハ寫真。視る所。彼國貴人逍遙の圖あり。男女必も手を
 引合ひ。或ハ腕と組合して。郊外を歩する。体宛も本邦の春宮帖。人情

本の口繪に似る。其醜態を擬め。夫婦別ありとりの教の立ざる
 戎俗を是と為め。軟件の両妾一個ハ紅梅。一個ハ青柳の風流あり。
 娛樂幸福此の如し。天賜の厚き所と雖も。先祖が百折千魔の軍
 旅を凌ぎ。遺恩なり。治乱得失の幸不幸。戦國よ出て忠義を尽
 命を陣門よ落し。子孫の開化も遺りて快樂を極め。命を瘡門よ
 墮せらる。這華族の祖先より。養ふ所の家臣なる。士分の威士族より。て
 舊幕府の旗下以上の家人。以上ハ其ころ御目見え。總て大名の士と同等なり。
 而して文明開化の。朝政を議する者ハ多く件の士族もあり。中官以下ハ
 各省局。卒族平民雜出也。介もど。綱領を把る者ハ始より華族
 あり。依り月給を希ふものハ其細の目より手を出さざり。或ハ

袖は為り或の身衣は為り或の表は為り或の裡は為り或の袖は為り。裾廻しは為り或の尻當は為り始より。押付らむと終るもあぐし。盛んたる哉開兮たり。薦舉龍門任選の今野は遺賢なり。然もとも神國の古風存して自然ら。上下の分ちある者。貴人の賢ゆして賤民の愚なり。何則に御一新の始より。大官あるの華族は在ぬ。士族なり。中等以下より士卒族農商田夫野人も。進士の幸を得ぬ耳。適農商ゆして奏任の貴きも昇る者。絶く元くして僅もあり。是平民の國事を議する。賢才なきを知らるのら。竊疑ふ太公望卧龍先生の何人ぞ。今の平民も。呂尚より。上手小鈎を為るものあも。之を迎ふる。文王なき。彼も

三本毛が足らぬ。孔明が梁父の吟より。月落鴉啼能く謳へども。雪中三顧の人元き。彼方今の當百。此錢當百と正札付あして八十文の是も馬鹿錢と云ふ。然も新鑄の錢より。大形あるを誇る者。匹夫下賤の俗。慢然として道らく。判任は出べらば。況や等外をや。其下ゆして。聴く者へ。判任を判人と思得。一長生も女衞も為られまほ。燈蓋親との令椿へ。行燈の油皿でも。商あるまで。あらうら。こと。這談。軒渠も堪ぬ。平民十ゆて八九人の大抵。傳る類も。時々の御布告の視るの。と。讀易く。解難。故に開化々々。一口毎ゆのら。開化の用化を知らむ。知らず開化の人。即ち開化の繁昌る。如斯愚昧の平民隊。彼中山靖王の苗裔。あ

知るべし。華族の家も其祖平民ありも在ぬべし。甚しき強盜
有まじき改めたる憚らば。彼の釣を盗む者ハ刑せられ。國を盗む者ハ
賞せらる。功臣ハ皆是盜の根株と。宋人の賦せし所又一詩あり道々。
不平を殺し尽して方今太平の華族あり。或ハ碌々卑賤
なるも其女が鼎中より世子と出でて高禄を子孫に受くる士族も有
べし。僅三百年間たる。十世左右の先後して華士族種の平民あり。平民
種の華士族あり。其平民種あり。今將華士族する時ハ自ら賢おして
華士族種も平民たる自ら不肖と知る。官途の三等は在る。如し。
遮莫今の平民も功を課する事あり。後の華族は為らざらむや。
倘虎の爲るべきを鼠の如く田間野外よ世に過る者あり。伯樂

るを數くめども。

皇國の捉を甚麼あるま。

風俗一様

文明開化の人々や。禮服嚴正の時ハ知らず。平服ハ貴賤の分あり。
燕尾或ハ丸外套を着。襦高袴ハ穿れども。刀を帶る者ハ尠し。
適腰ハ小刀或ハ匕首を帶る者百あり。一個あり。土圭の銀釘綴を襟
光ら。足ハ晒し鞆ハ表附の下駄手ハ蝙蝠傘をば。或ハ杖あり。肌ハ
赤白隨意のシヤスを着る。兩手ハ拳の它を見せ。衣紋甘きも
胸を露さば。此の如くして腰間ハ手拭を狭く下けて。晴天ハ足駄を履
者人稱して諸生風とい。是尋常一様の風俗也。只好惡新舊あり。耳
府縣の貫屬市井の工商社掌も寺僧も無恒産者も。医師も虚行兎も

代書人（兼者）。代書人の舊時の家主と公事師と。子母錢商も負債主も。旅人宿屋も（兼者）。併答文例を聞て知す。船宿も。雇人請宿も。俳優も。作者も。幫間も。音曲の藝人も。成一列のそらも。唐人の寐言先生（儒者）。詩人。洋人の假音見（西洋）。茶羅様（南宗）の書家。難波の画家。言靈の隊（和国）。侍。組人。茶人。文盲。俳諧。天狗。其它の分派。未だ。又一般ならぬ。就中俳優。靴髪。者未だ有らぬ。音曲家も。十して七八半髪。あまも。齊一帽。因循を覆ひ。斬半交之を帯。雑班人との云る。日本と外語。又文人墨客。舊弊維新相半。或除塵埃の駿蹄を掛。横町の撞着。眼をうり来。人と人を愕。或ハ鬚を生。復古と慕。あまのあらで。夷人。紛。を欲。洋服。身と固。佛國の短胴服。著。英國の靴。穿。洋杖。

何この國産を。日本帽を戴。一身數國の異服。雑交煮鍋も異。尙源三位頼政。現世。在。忽地。鶴と過り。射。或ハ。合羽。晴雨を嫌。且外套を兼帯。諸生外套。驕慢。念寐子半纏。眼。見。帯。木綿。縞。何。犢鼻褌。兩役を勤。者。疑。此の如き。千態。萬容。維新の風。吹。歩。間。合。大抵。車。客。依。人車の盛行。已前の駕籠。百倍。是。兩個。一個。兩個。駕。簡便の理。も。以前。駕。兼。者。中等。以上。多。況。下。賤。途。中。より。急病。發。家。歸。欲。婢。僕。も。又。大病。宿。下。時。あ。で。ハ。篋。駕。者。曾。先。開。化。の。人民。これ。及。て。商家の

丁稚の背負されたる荷物を下して前を置き車の上は安んじて居眠を補ひ
既よ取替を請取て引越して来る食婢の袱包を膝上は抱き主家の
門口も憚ららば車を架着て進み入る。是奉公の名を廢して主従の
義無りればあらむ。此俗終る雇人たる。微賤の修身を妨ぐると。其理は
疎き婢僕の無能歩行る足を車に駕るも廉あればこそ爰に至らぬ。
然も囊中空しくは怎生んとも為べからず。因りて丁稚の買物の使は出さ
ば必も泥濘ぬ路を下駄を穿き。是はたへば代價百五十の物と百七十五文と
雇人の請宿の口は任して雇錢を貪り一人前ふの足もせぬ其身のゆきを
計らぬも畢竟篋ゆる駕難うると車は容易く駕り。故に人車
の行りごと。初編は載る如くあれ。微本錢の小商ひ親方属の

工事を為るより車を牽くが長い錢は有附あんそ為熟する工商
各業を捨て一日壹朱り五匁の稱權輪代を出して車を借り街衢を立て
往來の男女が行方を推量り何處其許までの帰り車廉く行まはすと
薦めつ。彼方を問ひ此方を誘引る。車は通りの片端は數軒並べて
重々より有斯ハ原より工商あらぬ。三助の錢湯飯推助。搦米的門或ハ
己前の新網ある。樗蒲を坊主のスキラカボクノ。橋本町ある。住吉踊
の。カッポレもりあゆまらる。別て穢多の穢多非人まで洗こ足を又泥よ
汚して人車を曳めの日々も増こと秋を降る。雨の且の茸の如し。其徒
が寒き時腰はフランケンを纏ひつゝ宛も冥府の血池へ墮て浮まぬ
亡者の似。或ハ稻荷鮎の立喰。或ハ蝸子の横啞へ。或ハ串を貫たる。

獸肉の煮こみ。牛う豕う兎う大う。擇むよ及をび嘗りて舌を湯傷ま
 面色へ呵責勞の餓鬼よ似たり。或ハ四五人打集りて各握り拳を
 突出し。甲幾个乙幾个密々として數定め。齊一拳を開き見せ。錢
 數不定雜握し。甲ハ寡く乙ハ多く。或ハ空手餘數あり。各掌中なる
 錢多寡を惣括して幾个との中不中ハ贏輸ある之を号て難困とぞり。
 ソラ来しと慌忙し。互ハ圓居と打崩して背向し為りて嘯く。
 巡查が近づき来ぬまなり。是們ハ客を遅間ゆして既ハ客を得る
 者ハ車を輓出を勢ハ猛烈牛の似し首を伸し。馬の似し足
 揚る。走ること電光ハ彷彿。驛聲耳落々々雷鳴を壓倒せ。冷い
 哉牛頭馬頭が。火車欵と思ひきや。人もまがこそハイ請恕。請恕々と

聲をひつ。前の車を追まて。後の車は追まがどし。向ふより来る車ハ。
 指違ひさる相互ハ觸て推けんことを恐る。横町より突出する車通りを
 衝切らんとて一字を引き。街上を牽違ふ車。互ハ會釋して十字を
 成す。乃ち十一大區中。朱引内外人力車の。亶然とらぬ地も無かれ。
 往來の老人病人盲人。壁兒小童們的。危きこといをうなく。加ふるハ
 馬車の烈しきあり。平民無法の騎馬あり。歩人ハ是等ハ遮られく。
 舌打忌ター。ト寧くあり。或ハ剛化ハ後とる。半髮連の過て。股を露
 屯ハ引と。或ハ老人の俄然と。便の漏る。止むを得ず。一町先ハ
 白ペンキの便所が見えても堪兼て。傍邊の泥深を幸ひ。行便折しも
 巡查ハ来らんと。進退其処ハ窮り。共ハ屯ハ牽めて行れて。違式



廿四

鄙人露腿して
 巡査に外らるる
 圖

不知
 義之所
 適禮
 之所將
 甚乎
 無適乎



註違の贖金を若干徴せし徒に往来をの廣がる程漸々窮屈なる。世に不自由を成るなりと嘆息せるも在るむ又一愚人こそまを對して赤脛端折立小便の罰金、游激の役得これも施行の一個なり。あつて戲言を吐くも有りとぞ。縁有無を拘らば斯の如くは度難き。未開の頑民を扱ふ。敬言視警部巡查の奉職、宜容易き務あらむや。就中巡查の規則、廿有九條あり。其中より曰く、第一巡查、区内人民の健康権利を保全し。風俗を正しを以て務とす。第二持区内の居民并は道路行人より。困難出来しを救護を乞ふ時、何時あても相應じ。或は救護を乞ふも。見聞次第力を尽くして防護せよ。第三老幼廢疾婦人外國人等の就中注意して保護せよ。第十四條より第十五條まで略す。第十三條往来筋行人の妨害と

あふき物を見る時、速に之を取除くも。第十四道路の荒蕪溝渠の淤塞及び不潔の物あらば之を戸長は告て掃除せよ。第十五條第十六行人の道路或は其他の事を尋問せらるる時、丁寧は教達せよ。第十七稚子路も迷ふのらば之を保護し。其居所分明ありて其小区内あらば直に之を送致し。他の区内あらば次々の巡査員告て其家を逋送し。若し分明あらざる之を叱所より連れ、警部の指揮を受す。第十八芝居其他群集の所より出張して乱噪を防止せよ。第十九條第二十酒を酔ひ失心する者之を介抱せよ。其暴動する者、取押へ警部の指揮を受す。第二十一條路上狂犬ありて之を打殺し。戸長は告て之を取棄せしむ。此條甚し不審。今天殺しと云者ありて狂犬のより良犬よと投所より糞糞を乞て附置所の犬を欺て竊し其札を取り捨て之を打殺し公然として持行

あり傳(聞)く大(大)一匹を殺せが三貫文の錢(銭)有(有)つ(つ)と(と)を斯(斯)く巡(巡)査(査)其(其)手(手)を借(借)て害(害)を除(除)く大(大)何(何)りとも思(思)はれず蓋(蓋)し大(大)の世(世)益(益)あり大(大)を殺(殺)す者(者)ハ世(世)害(害)を為(為)す余(余)能(能)く其(其)狀(狀)実(実)を視(視)たり重(重)編(編)大(大)殺(殺)の段(段)を綴(綴)りて 第(第)廿(廿)五(五)鳥(鳥)獸(獸)魚(魚)類(類)を販(販)賣(賣)する店(店)ハ毎(毎)日(日)贖(贖)買(買)造(造)腐(腐)敗(敗)の後(後)世(世)仁(仁)慈(慈)ある人(人)ハ傳(傳)ふ 第(第)廿(廿)六(六)人(人)家(家)閭(閭)諍(諍)及(及)び或(或)ハ暴(暴)動(動)の者(者)ありて変(変)事(事)も及(及)むん(ん)と(と)する勢(勢)力(力)品(品)之(之)を檢(檢)査(査)す 第(第)廿(廿)六(六)人(人)家(家)夜(夜)間(間)戸(戸)締(締)油(油)断(断)の者(者)ありて速(速)ま(ま)之(之)其(其)ま(ま)知(知)ま(ま)す 第(第)廿(廿)七(七)人(人)家(家)閭(閭)諍(諍)及(及)び或(或)ハ暴(暴)動(動)の者(者)ありて變(変)事(事)も及(及)むん(ん)と(と)する勢(勢)力(力)あ(あ)る時(時)ハ入(入)て之(之)を取(取)鎮(鎮)むべ(べ)し云(云)々 又(又)其(其)心(心)得(得)の事(事)十(十)六(六)條(條)中(中)なる未(未)了(了)曰(曰)く得(得)物(物)ハ自(自)身(身)を擁(擁)護(護)する具(具)と心(心)得(得)狼(狼)人(人)を打(打)擲(擲)致(致)門(門)敷(敷)候(候)勿(勿)論(論)兇(兇)暴(暴)人(人)有(有)て手(手)ハ餘(餘)り止(止)ま(ま)し得(得)ざる節(節)ハ格(格)別(別)の事(事)巡(巡)邏(邏)中(中)傍(傍)人(人)朝(朝)弄(弄)する夫(夫)とありて雖(雖)も必(必)ず耻(耻)辱(辱)と思(思)ふらむ成(成)丈(丈)忍(忍)むるを要(要)す憤(憤)怒(怒)の色(色)を顯(顯)し争(争)鬪(鬪)之間(間)敷(敷)儀(儀)決(決)して致(致)間(間)敷(敷)候(候)云(云)々 仰(仰)ぎ視(視)べ(べ)し 天(天)朝(朝)の庶(庶)民(民)を安(安)撫(撫)しな(な)ま(ま)すこと 件(件)の御(御)條(條)目(目)著(著)明(明)ある孰(孰)く感(感)涙(涙)を拭(拭)きざらんや 其(其)第(第)一(一)條(條)ハ

所謂(所謂)風(風)俗(俗)を正(正)ま(ま)しとあり 是(是)治(治)國(國)の最(最)大(大)要(要)風(風)俗(俗)不(不)正(正)ある時(時)ハ干(干)戈(戈)動(動)ま(ま)れど(ど)の乱(乱)世(世)なり 菊(菊)亭(亭)右(右)大(大)臣(臣)晴(晴)季(季)公(公)の和(和)歌(歌)職(職)原(原)の抄(抄)曰(曰)く 貞(貞)享(享)四(四)年(年)行(行)布(布)衣(衣)符(符)衣(衣)直(直)垂(垂)素(素)袍(袍)袴(袴)等(等)ハ至(至)るま(ま)で何(何)れハ士(士)農(農)工(工)商(商)の品(品)々(々)ハ隨(隨)て普(普)用(用)ま(ま)す物(物)と見(見)えたり 抑(抑)衣(衣)冠(冠)を著(著)する事(事)ハ人(人)の禽(禽)獸(獸)ハ異(異)なる所(所)以(以)ありて冠(冠)婚(婚)葬(葬)祭(祭)ハ礼(礼)教(教)の重(重)んぶる所(所)なり 然(然)るに末(末)世(世)の悲(悲)しきハ上(上)下(下)ともハ大(大)方(方)ハ元(元)の服(服)を著(著)け(け)足(足)下(下)襪(襪)をも穿(穿)ら(ら)ば髪(髪)を乱(乱)して素(素)足(足)ありて走(走)る 世(世)間(間)々々 吉(吉)礼(礼)の服(服)も凶(凶)礼(礼)の服(服)も 些(些)臈(臈)次(次)差(差)別(別)なく 上(上)下(下)ともハ小(小)袖(袖)を著(著)し 喪(喪)ある時(時)も此(此)姿(姿)あり 庶(庶)參(參)し 吉(吉)月(月)良(良)辰(辰)あり 是(是)此(此)姿(姿)あり 世(世)ハ交(交)り 公(公)門(門)あり 出(出)入(入)も甚(甚)だ 俗(俗)ハ頭(頭)を半(半)額(額)ハ剃(剃)上げ 或(或)ハ月(月)代(代)とて半(半)ハ法師(法師)の天(天)窗(窗)を摸(摸)し 或(或)ハ皆(皆)剃(剃)りこ(こ)りて 樂(樂)阿(阿)弥(弥)陀(陀)と名(名)のぬ(ぬ)さ(さ)て

彼の男偶髪毛あつくと見れば。んのはほの蠅のともりたる程は結て。まうさげほり鬘捻鬚とて鬘の奴姿の目もあてられぬ道家たる為体なり。或の髪を剃らねばちかあり。さる末ねと二所三所くり結ほし。今様の刀脇差を大小二本さりとらばし。世も人の許さぬ竹杖木杖つきをくらば。さて帛入の大投頭巾は太くくらしを著し。そのいひぎごころゆりて。庭訓の式目の文言らき言葉といひ。少くもたの史記漢書等の語とり出ぬ。文書くそり却て充字をくま。文字の轉倒墨次の次第もなく。書ちららまあをぞいあをりなく浅ましうりける。貴賤上下の道わたりも。只同様まうち交り。貴人高家ともいふべ。賤も身ながら袂を合せて伴ふ行ちひ或の駒の蹄の

穢とさく延慮もなく踏うけさせ。男女互に手も手もとりて大路の様を戯れ通る。扶くべき老人を突倒し。懐く産き少人をせびらばし。市商人も人を欺して升目とせり。目と紛らばし。庄屋百姓も上を偽りて。盗とひそめ。地頭代官も己が私慾下をいそめ。民の妻子さうらせ。虐ごく。かゝる末世の形勢風俗といひあがら人の心の卑しくも。成りてあり事なると歎くは違かきことあり。是併あがら一朝一夕の事もあらば。五百年來の乱逆打つき。世間いと静かなる飛路よみ海賊破帆の徒いそぎ。陸地よみ夜盗辻切のそ起りて。京田舎の通路絶々よみ故よ。上も下も遠離て。上下の礼節都鄙の俗習あひくくよなりのせてゆき。此様よみなり下りぬるあはし。日本人十人よれば

十様は安も天窓もろりて一舳の風信あること候。長崎は入津しける唐人等日本人を見ず。吉山上下の品々れぬ國あり。誠は夷の風ありと言ふ笑ひ誹りしや。一通事の物語ありけり。誠は異國人を見らふ。紅毛ハ紅毛朝鮮人の朝鮮人。頭も衣裝もさる一様の出立あり。斯てぞ其國此國の人とあらざる。日本この時より縦令大聖賢哲の人ありとも。昔は復もとに俄よなる難事多し。いまだ赤裸よりなりても道を行く。衾を左あしき人となつらむ。せめて外套を着し。髪を束ねたりとも。礼義を重んずることを猶もせしめ。今此天下静平なりて八洲の外まで治めあり。廣き御めぐり筑波山の蔭よりも蕃く。士農工商の四民もあつて。儒佛醫隲の学派も盛んありて。

琴瑟書畫の上手も多く。諸藝方能の名人も都鄙山嶋をわたりたれ。礼を學び法を習はん。於ては誰の人成難くや。古は異國人の曰く。日本ハ君子國なりて。礼義正道の道徳者多く。且其國の人姪あらずとも。讚奉りける。日本あり。今此太平の御代は生れど。治世の浪は浴する者の自ら是とて未だ此非あることを。さとり知らざるこそことわりあれ。其積善の餘計ありて万人を此心得て。今數多の年月を。由經侍らば。そろく風移り俗変りて。礼義も法令も更り行ひて。君子國の正風よりくくたり。侍るべきものなり。異國人の為め笑つるまじきことあり。斯くぞ神國神道の教も弘まりて。豊原の中國安國と平けり。あろりめさんぞめでさるべき。此耻を雪がんと思ふ人の。只今の人を外むることなく。

後の人をよめめねく人と人のとりけるこそ実^げに理^りりと思^{おも}え云^い此書^{このしよ}
刊行の後今に至るは既^{いま}に百七十八年過ぬ當時正^{ただ}らぬ風俗と歎息^{なげき}
し書^{しよ}と丁寧^{ていねい}に取^とりて珍書^{ちんしよ}とあはれもあらぬと婦女子^{おんなこ}が觸目^{しゅくめく}稀^{まれ}なる長^{なが}
文^{ぶん}と引記^{ひきき}して古今^{ここん}の風俗^{ふうぶく}を二目^{ふため}せむ今^{いま}や開化^{かいけ}の時津風^{ときづかぜ}四夷^{しよい}八蛮^{はつばん}と吹廻^{ふきまわ}
て其宜^{そのよろ}しきを撰採^{せんさい}視取^{しとく}し用^{もち}の試^{たま}ひの間未^{いま}だ一定^{いちてい}せざれども今日^{こんにち}既^{いま}
開闢^{かいびやく}未曾^{みそぜ}有^ある繁昌^{はんしやう}昨日^{けふ}より十倍^{じふばい}たれが翌日^{あした}より百倍^{ひゃくばい}せん因^{よつて}て這^こ
繁昌^{はんしやう}誌^しも編^{へん}を重^{かさ}ねるに隨^{したが}て繁昌^{はんしやう}愉快^{うきやく}の佳境^{うきさやう}入^いらん本編^{ほんへん}愛顧^{あいこ}の看^{かん}
官^{くわん}の三編^{さんへん}發行^{いはん}の日^ひを遅^{おそ}くし彦^{ひこ}繁昌^{はんしやう}誌^しと尋^{たず}ねたもひね同種^{どうしゆ}同名^{どうめい}の書^{しよ}
他方^{たはた}は出^でられ違^{ちが}へぬと有^あるべからず勿論^{もちろん}開^{ひら}く大筆^{たいひつ}も蓮心^{れんしん}高目^{かうめく}
余^よがどれ猥劣^{わいりやく}の手輯^{てしやく}あらねば玉石^{ぎよくせき}を混淆^{こんごう}して比肩^{ひけん}並奏^{へいそう}するべからば

玉^{たま}の原来^{げんらい}光暉^{こうき}あり石^{いし}の磨^まけと何^{いかん}為^なで及^{およ}ばん余^よもども玄真^{げんしん}を求^{もと}
る何物^{なにもの}を問^とべや石^{いし}も亦^{また}弁^{べん}べらば弁^{べん}らば後^{あと}はあそ本編^{ほんへん}を綴^{つづ}るよ
暫^{しばし}く机^{まき}上^{の上}を塞^{ふさ}げし先^{まづ}以^も智慧^{ちゑ}体^{たい}を絞^{しぼ}るも左^{ひだり}右^{みぎ}は遅^{おそ}く版元^{はんげん}
より昨日^{けふ}も今日^{こんにち}も催促^{せんそく}の伴^{ばん}の人足^{ひとあし}繁^{ひら}々^{ひら}たるは蹄^{てい}輒^{りやく}見^みせぬ草^{くさ}の扉^{ひら}の
一時^{いちじ}繁昌^{はんしやう}の為^{ため}体^{たい}是^{こゝ}將^{まさ}開化^{かいけ}の御恩^{ごおん}とこそ



- 畫圖 三木光齋
- 浄書 青木東園
- 校合 濱口金彦
- 仝 小山乙秀

東京開化繁昌誌第二編卷之下畢

乙彦繁昌誌重編畧目錄

九段坂上招魂社

四谷大岩大神

柳橋川上稻荷

御命講時雨櫻

世倍發興市入狂季

芝圓山花邸

鎮道通條地名里數

市中瓦斯燈

御拂下地新開町屋

三弦堀大神宮新宮

下谷摩利支天

淺草大悲閣群參

神佛開帳

葬礼神佛隨行

新橋之ステーキ

餘興横濱

室町三井巨舖

各小区内小學校

大河端楠公遙拜社

水天宮轉地

御講日和

富士講揚旗

芝増寺跡公園

蒸氣車雷奔

新橋以北煉化石屋

旅籠町(大)大廳

諸所説教開場

江戸橋京橋石造

上野下寺新開町附

平民乘馬

市中殺犬

郵便即達

私塾家塾

新書籍盛行

篋頭舖開化

戲場元祖中村座

各小区内の扱所

永代橋改架

花見之殺風景

生鬚新古

火場附火丁改整

新聞誌盛弘

文人墨客

相撲晴天十日

混堂因循

猿若坊三自宮崎新座

印紙界紙賣捌所

淺草既橋新架

墨水櫻花附新栽永機櫻

斬髮西染

街衢道普請

西洋學士

俳諧師立社

寄晝席夜席

音曲諸藝評

九代目市川團十郎

雇人請宿

雇男女

女刺師

吉原町再集の遊女

西洋醫跋扈

和漢蘭書生風

夜陰の水茶屋

根津娼妓鳩浮巢

四驛娼妓寒苦鳥

上等の外妾

月外宅

私窠子

伴追日編を重ぬて序次に記載せる所を系地と具し摸し其事情

を詳し寫し。羣下の風俗毒滲あを遠邦未見の客よ適に蓋控文

陋港あれは夫人君子の看くのみ思ふらねど勉て温古知新の微きあり

睡魔を駈の料のこならで文明開化の旨を識る補益の裨史と称

して可あり。僕本編者よ縁有れば其由の澄人よまてく涯畧を

記も者も

本郷日蔭町の市隠

關根只誠

發兌書目

東京神田明神下松住町

萬青堂 別所平七

四書集註

十冊 新點素讀本

枕山詩鈔

六冊 當時現存大家大沼氏詩集なり

皇朝名家絶句

三冊 近時盛行ノ絶句類撰ニ倣ヒ皇朝ノ名詩ヲ弘ク集メシ書ナリ

時序名勝題画詠詩

慶應十家絶句

二冊 枕山湖山ヲ始メ其他ノ名家十名ヲ集ム

清十家絶句

二冊 錢謙益朱竹垞其他ノ十家ヲ輯ム

書家聯錦

全 書家席上必携語集

清 天基石著

狩谷被齋閣
萬葉假名梯 全

萬葉の字義音訓ヲ加ヘ
改正ス

平野橋翁帝詔
心學孝行種 三冊

本居宣長撰
秘本玉久の夢 二冊

皇朝經濟ノ事ヲ大人ヨリ去ル
公へ上書ナリ

令集解 三十冊

古寫本校字

曲亭馬琴翁著
雅俗要文 全

萩原乙彦著
全 二編 全

○雅語又俗事ヲモ兼最面白キ文意
多ク且解シ易カラシ為篇亦ニ其字義
出所等ヲ釈シタル能キ手簡ノ手ナリ
○前編ニ倣フト虽正文跡旧俗ニ異ニ漢語ヲ
旨トシ文明開化ノ奇文多ク童蒙進字
ノ一助トモナルベキ書ナリ

萩原乙彦著
開化商賣往來 全

小室樵山書

同
皇朝單語字類 五冊

小学教則素讀本習字兼大字ニテ
讀易キ書ナリ

萩原乙彦補編
漢語二重字引 全

同
十八史畧俗解 十冊 近刻

青木東園馬字
萩原乙彦撰
東京開化繁昌誌 禹人 初編二冊 近刻

女大學 小室樵山書

真草千字文 同書

女今川 同

玉銚百首 同

女小學 同

